

百目木(3)遺跡

— 国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2021年3月

青森県教育委員会



調査区全景（写真上方が北）

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和元年度に国道279号横浜南バイパス道路改築事業予定地内に所在する百目木（3）遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代の溝状土坑が検出され、狩猟域であることがわかりました。

本報告書は、それらの調査成果をまとめたものです。今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和3年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 禎 人

例 言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和元年度に発掘調査を実施した、横浜町百目木(3)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、2,300㎡である。
- 2 百目木(3)遺跡の所在地は、青森県横浜町字百目木、青森県遺跡番号は406029である。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した県土整備部道路課が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和元年8月27日～同年10月30日
整理・報告書作成期間	令和2年4月1日～令和3年3月31日
- 5 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し青森県教育委員会が作成した。執筆及び編集は青森県埋蔵文化財調査センター齋藤正文化財保護主幹、藤田祐文化財保護主事が担当した。依頼原稿の執筆者名については文頭に記した。発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本報告書の内容が異なる場合においては本報告書が優先する。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真、遺物の写真撮影	有限会社 無限
--------------	---------
- 7 遺跡の地形・地質に関する原稿執筆は元青森県立浪岡高等学校教諭 山口義伸氏に依頼した。
- 8 石質鑑定は国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科 佐々木実氏に依頼した。
- 9 本書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「陸奥横浜」を使用している。
- 10 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 11 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。土坑：SK、溝状土坑：SV
- 12 土層の色調表記には、『新版土色帖』(小山正忠・竹原秀雄)を用いた。
- 13 基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土には算用数字を使用した。
- 14 遺構実測図の縮尺は、1/60に統一してスケールを示した。事業計画路線図や遺構配置図は縮尺を変更し、挿図毎にスケールを示した。
- 15 遺構実測図の土層断面図には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 16 各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載した。攪乱によって壊されているものは()を付して記載した。
- 17 遺物実測図の縮尺は、土器は1/3、剥片石器は1/2とし、挿図毎にスケールを付した。
- 18 遺物写真には、遺物実測図の図番号を付した。縮尺は不同である。
- 19 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 20 発掘調査及び整理、報告書作成に際し、下記の機関と方々からご協力、ご指導を得た(敬称略、順不同)。横浜町教育委員会、福田友之、瀬川滋

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

写真図版目次

表目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査及び整理体制	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の経過	3
第2章 遺跡の環境	7
第1節 遺跡周辺の歴史的環境	7
第2節 遺跡周辺の地形及び地質	10
第3章 検出遺構と出土遺物	15
第1節 土坑	15
第2節 溝状土坑	19
第3節 出土遺物	30
第4章 総括	31
引用・参考文献	33
遺構計測表	34
遺物観察表	34
写真図版	35
報告書抄録・奥付	

図版目次

図 1	遺跡位置図	5	図 8	土坑(2)	26
図 2	事業計画路線図	6	図 9	溝状土坑(1)	27
図 3	百目木(3)遺跡と周辺の遺跡	8	図 10	溝状土坑(2)	28
図 4	遺跡周辺の地形分類	11	図 11	溝状土坑(3)	29
図 5	基本層序	13	図 12	出土遺物	30
図 6	遺構配置図	14	図 13	溝状土坑配置図	32
図 7	土坑(1)	25			

写真図版目次

写真図版 1	調査区遠景	35	写真図版 9	溝状土坑(2)	43
写真図版 2	調査区近景・基本層序	36	写真図版 10	溝状土坑(3)	44
写真図版 3	調査状況	37	写真図版 11	溝状土坑(4)	45
写真図版 4	土坑(1)	38	写真図版 12	溝状土坑(5)	46
写真図版 5	土坑(2)	39	写真図版 13	溝状土坑(6)	47
写真図版 6	土坑(3)	40	写真図版 14	溝状土坑(7)	48
写真図版 7	土坑(4)	41	写真図版 15	出土遺物	49
写真図版 8	溝状土坑(1)	42			

表目次

表 1	周辺の遺跡	9
表 2	土坑計測表	34
表 3	溝状土坑計測表	34
表 4	土器観察表	34
表 5	石器観察表	34

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱については、青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）と青森県県土整備部道路課及び上北地域県民局地域整備部（以下「事業者」）が平成26年度から継続的に協議・踏査を行っており、状況が整い次第、試掘調査を実施することとしていた。令和元年度に用地買収や上物撤去が完了した牛ノ沢遺跡隣接地について文化財保護課が試掘調査を実施し、遺構や遺物が検出された。これにより工所用幅杭No.168～174間については百目木（3）遺跡として新規登録を行った。百目木（3）遺跡は令和元年度中の工事発注を予定していたため、文化財保護課と事業者との協議において、令和元年度に埋蔵文化財調査センターが行うこととなった。なお、百目木（3）遺跡に係る土木工事等のための発掘調査に関する通知書は、令和元年8月7日付上県局整備第763号で上北地域県民局長から文化財保護法第94条第1項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が令和元年8月23日付青教文第716号で工事着手前の本発掘調査を指示している。（齋藤）

第2節 調査及び整理体制

1 発掘調査体制

令和元年度に行われた文化財保護課の試掘調査の結果により、センター杭No.170～173の間の発掘調査を行うこととした。調査結果から縄文時代が主体の遺跡であり、遺構・遺物の検出と層位的な調査に主眼をおいて発掘調査を進めることとした。

発掘調査体制は以下のとおりである。

[令和元年度]

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	鈴木 学（令和2年3月定年退職 現スポーツ健康課総括主幹専門員）
	次長（総務GM）	川村 和夫
	調査第二GM	笹森 一朗（令和2年3月定年退職 現埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹）
	文化財保護主幹	齋藤 正（発掘調査担当者）
	文化財保護主事	藤田 祐（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授（考古学）
〃	工藤 竹久	青森県文化財保護審議会委員（考古学）
〃	佐々木 実	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）
〃	山口 義伸	日本第四紀学会会員（地質学）

2 整理・報告書作成体制

整理・報告書作成体制は、発掘調査に携わった職員で構成する。

[令和2年度]

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	佐藤	禎人
	次長（総務GM）	川村	和夫
	調査第二GM	齋藤	岳
	文化財保護主幹	齋藤	正（報告書作成担当者）
	文化財保護主事	藤田	祐（報告書作成担当者）

第3節 調査の方法

1 発掘調査の方法

[測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定] 測量基準点と水準点については世界測地系に基づく既知点を利用した。水準原点については、調査区周辺に打設している3級基準点H25-3No.9(35.533m)を用い、調査区内に水準点移動を行った。グリッドの設定は、1グリッド4×4m、原点は平面直角座標第X系のX=115740、Y=35780である（IA-0）。南から北方向にアルファベットと文字1巡による重複を防ぐためローマ数字を組み合わせ、アルファベットにはZは使用せず、Yの次はAとした。西から東方向には算用数字を付した。呼称は南北及び東西の組み合わせによる南西隅交点杭の杭名を用いた。

[基本層序] 各遺跡の基本層序については表土から順にローマ数字をつけて呼称した。

[表土等の調査] 文化財保護課が実施した試掘調査の結果を踏まえ、状況を確認しながら重機を使用し、掘削の省力化を図った。

[遺物包含層及び遺構の調査] 上層から層位毎に人力で掘削した。原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。検出遺構は、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて設定した。遺構内の堆積土層には確認面から層序番号を算用数字で付し、ローマ数字を付けた基本層序と区別した。遺構の測量に関しては、トータルステーションによる測量点を元に（株）CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）を用いて行った。遺構内の出土遺物については、層位毎で取り上げた。

[写真撮影] 原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル各フィルム及び約1800万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ドローンによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影も行った。

2 整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] トータルステーションで作成された測量データを、（株）CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）で読み込み整理を行った。遺構は原則として縮尺1/60で図化した。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

[写真類の整理] 35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスラ

イドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付け、ハードディスク・DVD等に保存した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元] 遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土地点・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等は、収納したポリ袋に注記した。

[報告書掲載遺物の選別] 遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、時代・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

[遺物の観察・図化] 十分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。

[遺物の写真撮影] 業者に委託して行い、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

[遺構・遺物のトレース・版下作成] 遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、(株)CUBIC製「遺構くん」(遺構実測支援システム)、「トレースくん」(遺物実測支援システム)、Adobe社製Creative Cloudの「Illustrator」を用いた。図版の版下作成はAdobe社製Creative Cloudの「PhotoShop」、「Illustrator」を用いて行った。

[遺構の検討・分類・整理] 遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

[遺物の検討・分類・整理] 遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

第4節 調査の経過

1 発掘調査の経過

百目木(3)遺跡の調査は同年8月27日～10月30日の期間で行った。発掘作業の経過は以下の通りである。

8月27日 発掘調査器材を搬入して、調査区東側から重機による表土除去を進めた。

9月上旬 縄文時代の土坑や溝状土坑を検出し、遺構精査を開始した。

9月26日 横浜町文化財審議委員の遺跡見学が行われ、文化財審議委員と横浜町教育委員会職員が訪れた。

10月上旬 当初の発掘調査範囲であった工事中センター杭No.170以南にも遺構が続いていくことが判明したため、協議を行い調査範囲を拡張することとした。

10月30日 全ての調査を終了し、調査区の埋め戻しを行い、調査器材を撤収した。

2 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は令和2年度に実施することになったが、写真類の整理作業及び遺構図面の整理作業の一部は、調査終了後の令和元年11月中に終了している。その他の整理・報告書作成作業は令和2年4月1日から令和3年3月31日までの期間で行った。発掘調査では段ボール箱換算で1箱の土器や石器が出土している。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書には、遺構や遺物の数に応じて各々の記載にあてることにした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

〔令和2年度〕

- 4～6月 令和元年度発掘調査出土遺物の計量、接合、復元、拓本作業を行った。
- 7月～ 遺構写真図版の作成を開始した。
- 8月～ 出土遺物の図化作業、遺構図の修正を開始した。
- 11月～ 出土遺物の写真撮影を行うと共に調査成果を総合的に検討し、報告書の原稿作成を開始した。
- 12月 印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。
- 1月 出土遺物のトレース、遺構図版、遺物写真図版の作成を開始した。印刷業者へ原稿及び版下を入稿した。
- 2月～ 校正及び記録類・出土遺物等の整理を行った。
- 3月10日 3回の校正を経て報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類・出土遺物等を整理して収納した。 (齋藤・藤田)



図1 遺跡位置図

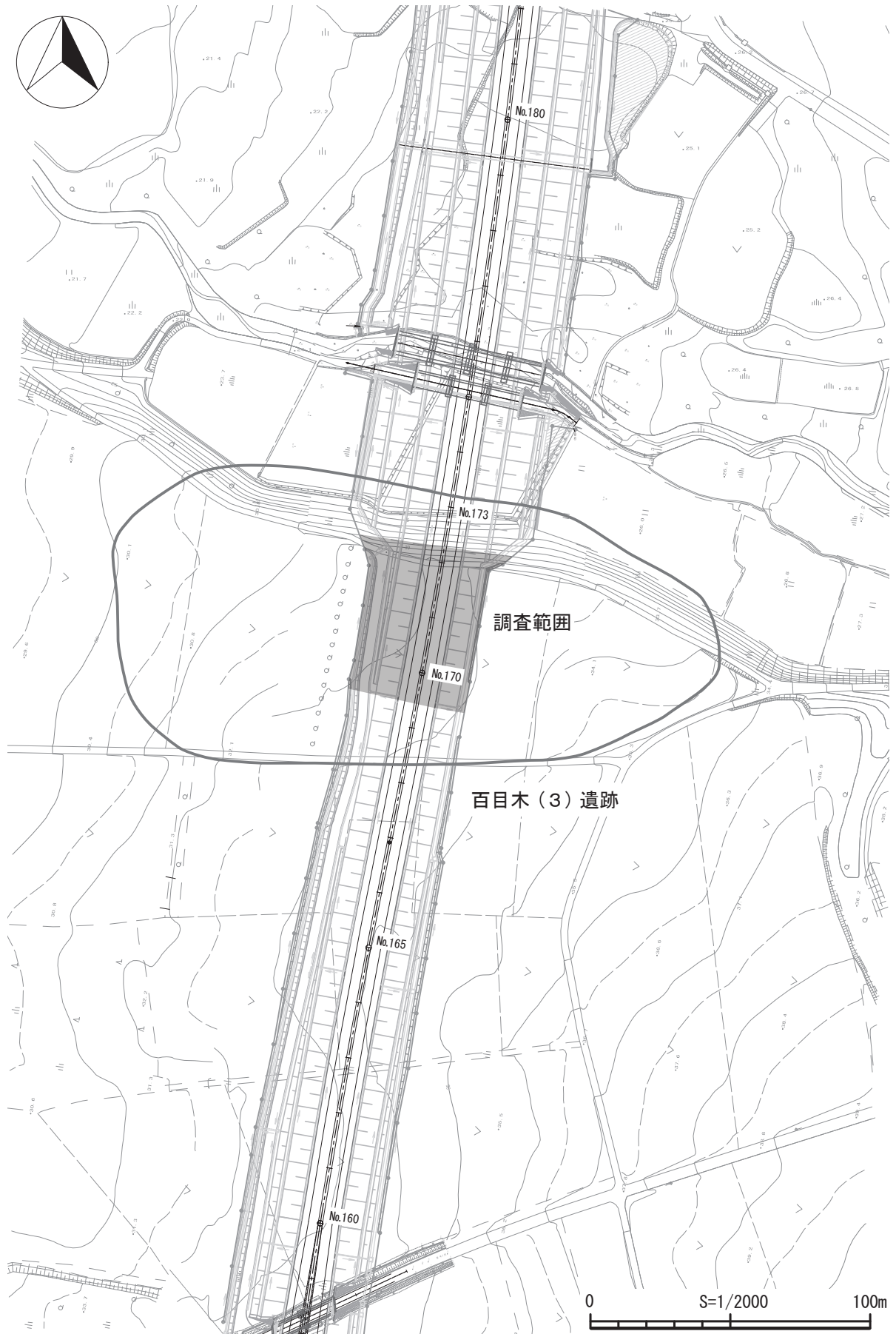


図2 事業計画路線図

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の歴史的環境

百目木（3）遺跡は横浜町中心部から南へ約5kmの段丘上に所在している。横浜町内の遺跡は陸奥湾に注ぐ桧木川、三保川、荒内川、牛ノ沢川に面した段丘上に分布している。百目木（3）遺跡周辺の遺跡を遺跡地図を基に作成したものが図3と表1である。縄文時代、または平安時代の遺跡が多いが、弥生時代や中世の遺跡もみられ、縄文時代以降、断続的に遺跡が営まれてきた地域といえる。これまで発掘調査が行われることが少なかったが、近年、横浜北・横浜南バイパス建設事業に伴い発掘調査が行われて新たな発見が得られている。以下、発掘調査が行われた遺跡の成果を中心に記載する。

旧石器時代

発掘調査ではないもの、吹越の海岸において旧石器時代終末の細石刃文化期の石器が採集されている（角鹿1980）。

縄文時代

桧木遺跡は桧木川流域の遺跡である。遺構は検出されていないが、大量の遺物が出土している。遺物は縄文時代晩期が主体を占めるが、縄文時代後期の十腰内V式の壺型土器も出土している。縄文時代晩期の土器は大洞B～C1式が出土しているが、大洞C1式が多くを占めている。深鉢、壺、鉢、台付鉢、皿、注口土器、製塩土器が出土している。この他に石器、土製品（土偶、土版、耳飾）、石製品（円盤状石製品、石刀等）が出土している。特記される遺物としては獣面突起付きの土器、サメ歯穿孔装飾品が挙げられる（横浜町教育委員会1983）。モダシ平遺跡は荒内川流域の遺跡である。遺構はフラスコ状土坑、溝状土坑を検出している。遺物は縄文時代後期・晩期の土器が出土している（青森県教育委員会2000）。三保川流域の林ノ脇遺跡から遺構は土坑、溝状土坑を検出している。遺物は縄文時代早期、中期～晩期の土器と石器が出土している（青森県教育委員会2021）。吹越川流域の吹越（2）遺跡（令和2年度発掘調査）では溝状土坑を検出している。

弥生時代

モダシ平遺跡から弥生時代後期の土器が出土している。林ノ脇遺跡からは竪穴建物跡が検出されたほか、弥生時代後期の土器が出土している。

平安時代

モダシ平遺跡から土師器が出土している。林ノ脇遺跡からは竪穴建物跡、溝跡、焼土遺構等が検出され、遺物は土師器、須恵器、土製品、鉄製品等が出土している。

中世

横浜館、牛ノ沢遺跡、寺屋敷が存在する。発掘調査は未実施であるが、現地踏査が行われている（青森県教育委員会1983）。横浜館は七戸南部氏一族の横浜氏が居住したと言われ、天正19年（1591）の九戸政実の乱には、九戸城へ集結した者の中に「横浜左衛門尉将監」の名前が見える。横浜館の規模は東西150m、南北300m。14世紀の青磁片が採集されているという。牛ノ沢遺跡は町内遺跡の中で唯一の町指定史跡である。2つの曲輪から成り、空堀が巡っている。志野、唐津、伊万里等の陶磁器が採集された報告がある（福田他1986）。寺屋敷は空堀を持つとされる。（齋藤）

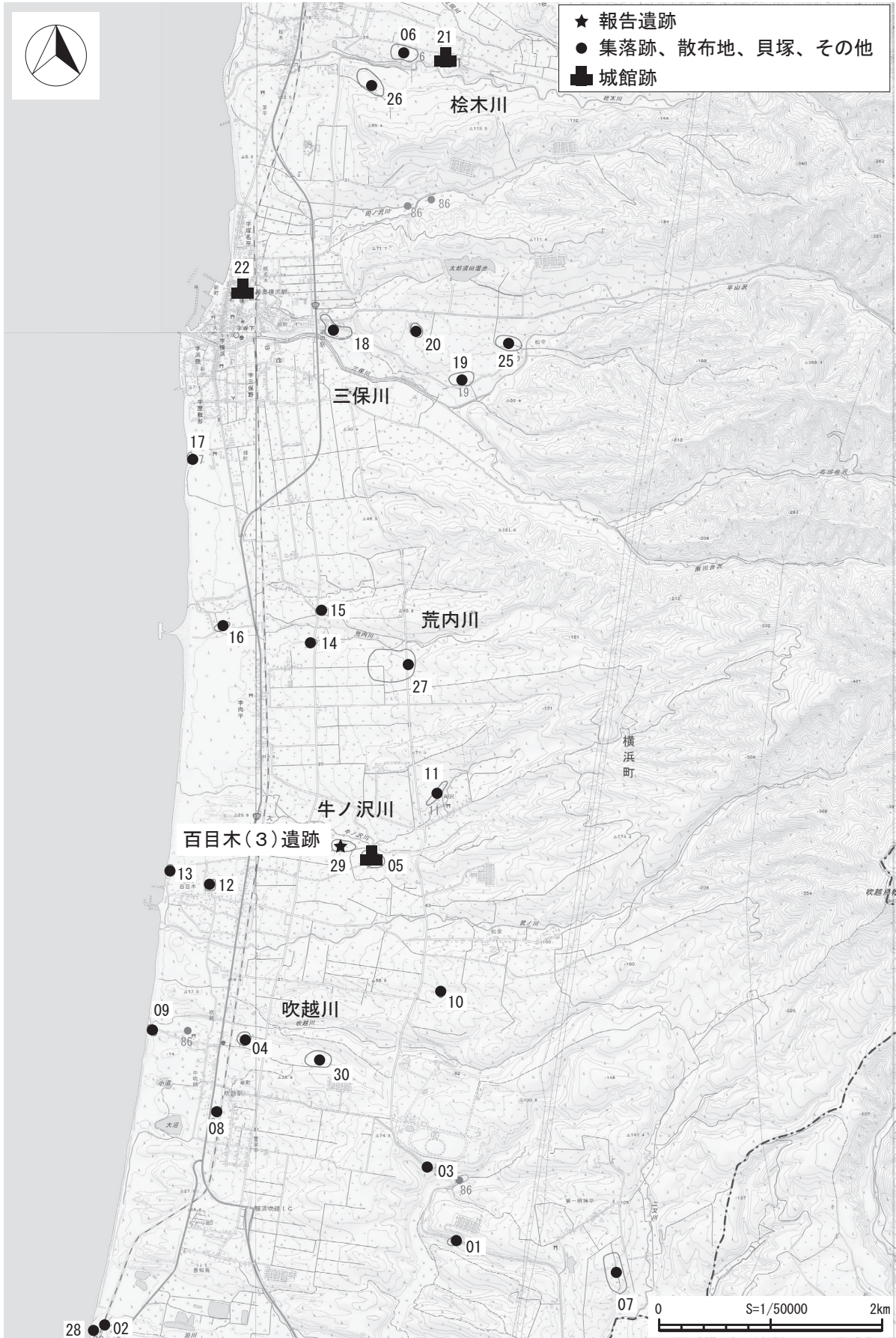


図3 百目木（3）遺跡と周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	種別	備考
406001	とまり川（1）遺跡	縄文（後期）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406002	とまり川（2）遺跡	弥生	散布地	
406003	雲雀平（1）遺跡	縄文（中・後・晩）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406004	明神平遺跡	縄文（晩）、弥生（後）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406005	牛ノ沢遺跡	中世	城館跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1983 青森県の中世城館
406006	松木遺跡	縄文（晩）、弥生（後）	集落跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1983 松木遺跡 横浜町教育委員会
406007	鳥帽子平遺跡	縄文（後・晩）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406008	中吹越遺跡	平安	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406009	吹越遺跡	平安、近世	貝塚 その他	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406010	松栄遺跡	縄文	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406011	向沢遺跡	縄文	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406012	百目木（1）遺跡	弥生、中世	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406013	百目木（2）遺跡	平安、近世	散布地 生産遺跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406014	荒内川（1）遺跡	縄文（晩）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406015	荒内川（2）遺跡	縄文（後・晩）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406016	荒内川（3）遺跡	平安	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406017	横浜遺跡	平安	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406018	林ノ脇遺跡	縄文（草創期・早期） 弥生 平安	集落跡	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1994 青森県埋蔵文化財調査報告書第165集 1994 青森県埋蔵文化財調査報告書第605集 2020 青森県埋蔵文化財調査報告書第615集 2021 青森県埋蔵文化財調査報告書第620集
406019	松守遺跡	縄文（晩）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集 1994 青森県埋蔵文化財調査報告書第165集
406020	太郎須田遺跡	縄文（後）	散布地	1973 青森県埋蔵文化財調査報告書第1集
406021	寺屋敷	中世	城館跡	1983 青森県の中世城館
406022	横浜館	中世	城館跡	1983 青森県の中世城館
406025	松守（2）遺跡	縄文	散布地	
406026	家ノ前川目遺跡	縄文	集落跡	1997 青森県埋蔵文化財調査報告書第227集
406027	モダシ平遺跡	縄文、弥生、平安	散布地	2000 青森県埋蔵文化財調査報告書第271集
406028	雲雀平（4）遺跡	平安、近世	散布地 生産遺跡	
406029	百目木（3）遺跡	縄文	集落跡	2020 青森県埋蔵文化財調査報告書第615集
406030	吹越（2）遺跡	縄文	集落跡	2020 青森県埋蔵文化財調査報告書第615集 令和2年度発掘調査

図3には遺跡番号の下2桁を記載した

第2節 遺跡周辺の地形及び地質

調査員 山口 義伸

百目木（3）遺跡は上北郡横浜町字百目木地内に位置する。下北半島の頸部中央部には石川台（標高338.5m）、金津山（520.2m）、八郎烏帽子（422m）、御宿山（498m）、吹越烏帽子（507.8m）などの山稜を連ねた吹越山地が位置する。この山地は起伏に富んだ南北性の隆起帯であって、西の陸奥湾と東の太平洋とを隔てている。山地外縁には砂子又丘陵があり、むつ市の東方から南方の六ヶ所村にかけて陸奥湾側に山地を取り巻くように広く分布する。標高80～200mの定高性はあるが、開析度の高い丘陵として展開する。そして、陸奥湾岸に沿って帯状の中位段丘が分布し、湾岸には小規模ながら砂丘地がみられる（青森県史2001）。

下北半島の頸部中央部の地質を概観すると、第三紀中新世の泊層、第四紀更新世の浜田層、田名部層が主に分布する。泊層は吹越山地を構成し、主に凝灰角礫岩、安山岩～玄武岩質溶岩、安山岩質凝灰岩などからなる。泊層の外縁には浜田層及び田名部層が堆積し、丘陵及び中位段丘の基盤を構成する。浜田層は主に半固結の灰白色砂岩・シルト岩からなり、田名部層は主に軟弱な淡褐色砂・軽石質砂、礫、粘土からなる。なお、中位段丘は津軽海峡に面した北部海岸に分布するM-1面に対応し、指標火山灰である約12万年前の洞爺火山灰Toyaを載せる（青森県史2001）。

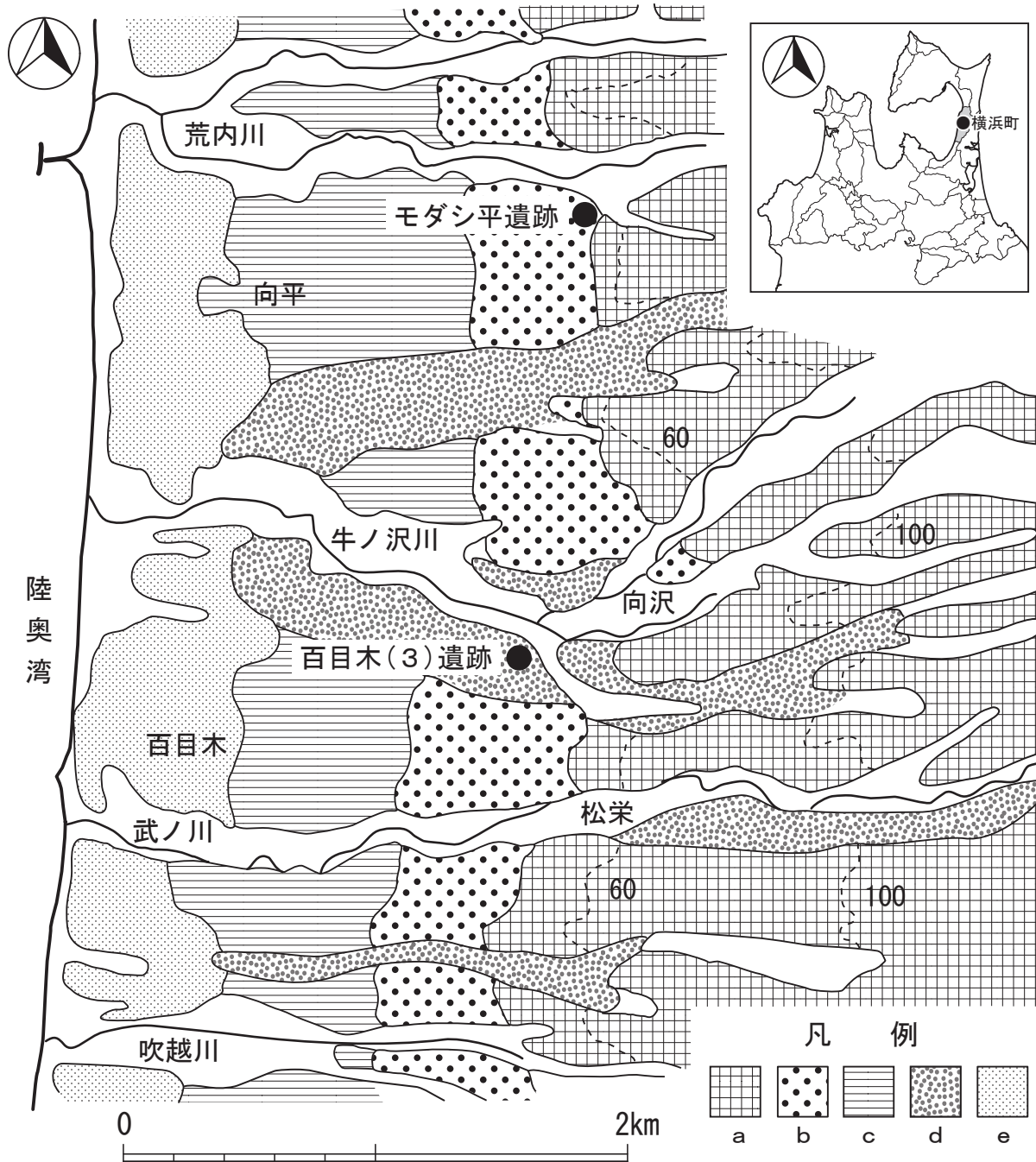
鈴木・宮脇（1998）は横浜町の、特に三保川以北の段丘地形を詳述している。これによると、丘陵の尾根に分布する高位段丘は標高100～120mであって、火山灰層と礫層（厚さ約10m）で構成されている。構成層である礫層は塊状で淘汰が悪く、安山岩質の垂角礫を主体とすることから扇状地性の堆積物であると指摘している。中位段丘については堆積相から段丘を2段に区分している。1つは標高35m以上に存在し、鶏沢川や桧木川、三保川などの河口を中心に高位段丘と同様に扇状地性の塊状砂礫層が堆積する。もう1つは層理の発達した砂礫や淘汰された粗粒砂などが標高35m以下に堆積する。前者の段丘はToyaを載せる、標高約60mに達するやや勾配のある傾斜面であり、後者は海成段丘（10～30m）と河成段丘（10～60m）に細分している。図4の遺跡周辺の地形分類の中で、細分された中位段丘は上位面が鈴木・宮脇（1998）の扇状地性堆積物を構成層とする段丘に、下位面がほぼ海成段丘に対応する。なお、三保川以北では丘陵末端の標高40～50m付近に比高20m超の段丘崖が認められるが、以南では崖錐や崩落、あるいは土石流の発生によって段丘崖が後退して不鮮明であることから中位段丘との境界を標高50m付近とした。

佐々木（2000）は中位段丘上に立地するモダシ平遺跡においてToyaは確認できなかったものの、十和田八戸軽石To-H（柴ほか2009）相当の千曳軽石と粘土質火山灰の堆積を報告している。基盤には斜交葉理の発達した淘汰された中粒砂層（田名部層）が堆積し、上位には径10cm大の安山岩礫や赤褐色火山灰塊を多量に包含する中粒砂層、赤褐色火山灰質砂層や径10cm大の安山岩礫を含む砂礫層などの側方変化の著しい堆積物が載る。これらの堆積物は鈴木・宮脇（1998）の指摘する扇状地性の堆積物に相当すると考えられる。なお、千曳浮石直下には赤褐色粘土質火山灰があって、Mn粒の沈着が特徴的である。

横浜町は下北半島の頸部中央部の陸奥湾側にあって、丘陵末端が湾岸から1.5～2kmの距離まで迫

っている。中位段丘は湾岸に平行して1～1.5kmの幅で帯状に分布し、標高10～30mの下位面が緩い傾斜面として、標高30～50mの上位面がやや勾配のある傾斜面として展開している。そして、丘陵末端の段丘崖が不鮮明であることから標高200m付近まで緩やかに弧を描くように続く。

また、各河谷間に分布する丘陵には標高150～200m付近に溝状の谷地形がみられ、中位段丘に達した後消滅する。特に、牛ノ沢川流域の南北両側では丘陵から段丘崖にかけて深さ20～30mの溝状の谷地形がみられるが、中位段丘上では幅広の断面形で数m以下の浅い谷状凹地をなしている。牛ノ沢川



- a. 丘陵 b. 中位段丘(上位面) c. 中位段丘(下位面)
 d. 泥流定着地 e. 砂丘地

図4 遺跡周辺の地形分類

流で発生した泥流を含む土石流は牛ノ沢川だけでなく、その一部が北側の丘陵から中位段丘上に向かって、南側では丘陵から牛ノ沢川に向かって流下したと考えられる。なお、武ノ川では河谷沿いの台地に松栄集落が位置しているが、これは河床に定着した土石流堆がその後の浸食から取り残されて段丘化したと考えられる。

百目木（3）遺跡は横浜町中心街から約4km南方の牛ノ沢川流域にあって、東方には吹越烏帽子が位置する。調査区は河口から約1.5km上流の牛ノ沢川南岸に分布する中位段丘上に立地し、標高36～37mと平坦である。北端は約10mの急崖で牛ノ沢川に臨む。牛ノ沢川は河床勾配が緩く、標高50～60mの向沢集落付近までは幅100～200mと広く水田として利用されている。集落の北側を流れる支流は標高100m付近では幅300mにも及ぶ箱形の河谷となっていて、その中を蛇行しながら流れている。なお、吹越烏帽子の西斜面（標高400m付近）には周氷河地形の一つである礫質構造土がみられる（青森県史2001）。

次に、調査区内の基本層序については、北端に設定されたトレンチでの観察をもとに述べる（図5）。同段丘上に立地するモダシ平遺跡（佐々木2000）と比較すると、調査区内では指標的な千曳浮石（To-H相当）と直下のMn粒の沈着した赤褐色火山灰が欠如している。また、溝状土坑での土層をみると、検出面（V層）の下位には厚さ100cm超の黄褐色シルト質～細粒砂質粘土層が堆積していて、この粘土層はモダシ平遺跡で確認された千曳浮石直上の軽石塊や砂塊を含んだ粘土層（厚さ100cm以下）に対応すると考えられる。これは上述のように、牛ノ沢川流域を流下した土石流が溢出して流域沿いの段丘面を覆った堆積物と考えられる。

第Ⅰ層 黒褐色土（10YR2/2） 耕作土で、砂質粘土塊の混入が目立つ。堅固ではあるが、締りに欠け乾くとブロック状の割れが目立つ。下半部にはややソフトな腐植質な旧表土が堆積する。

第Ⅱ層 暗褐色土（10YR3/4） 全体的に細粒砂質で、酸化の染みがみられる。砂質粘土塊が混入するものの土壌化が進み、その輪郭が風化によりぼやけている。

第Ⅲ層 黒褐色土（10YR2/3） Ⅱ層同様に細粒砂質である。全体的に腐植質であるが、部分的に黒褐色（10YR2/2）の腐植質土のブロックが点在することでⅡ層との境界が鮮明となる。

第Ⅳ層 暗褐色土（10YR3/3） 漸移層である。径10cm大以下の粘土塊が包含されるが、土壌化が進み暗い色調となる。粘土塊は風化により細粒化したり輪郭がぼやけて新鮮な核が点在したりする。

第Ⅴ層 黄褐色土（10YR5/6） 漸移層である。Ⅳ層とは凹凸のある境界面で接する。凸部ではⅣ層と同様に土壌化が進んで暗い色調であるが、凹部では径10cm大以下の粘土塊が多量に包含され、全体的には明るい色調である。本層上面が遺構検出面であり、炭化粒の混入が多少認められる。

第Ⅵ層 黄褐色土（10YR5/6） 塊状のシルト質～細粒砂質粘土であり、下位ほど細粒砂質となり細粒砂へと漸移する。上部の約10cm部分には径10cm大以下の暗褐色土塊や砂質粘土塊が多量に包含され、乾燥するとブロック状の割れが目立つ。本層は丘陵を構成する浜田層や田名部層を反映した堆積物であって泥流を含む土石流堆積物と考えられる。

引用・参考文献

岩井武彦・木村寛治・佐藤 巧（1971） 土地分類基本調査「陸奥横浜」5万分の1表層地質図，青森県。

鈴木茂之・宮脇明子（1998） 横浜町に発達する段丘の地形と堆積物，OKAYAMA University Earth Science Reports, Vol. 5, No. 1.

鈴木隆介（2000） 建設技術者のための地形図読図入門 第3巻 段丘・丘陵・山地，古今書院。

佐々木辰雄（2000） モダシ平遺跡，青森県埋蔵文化財調査報告書第271集，青森県教育委員会。

青森県（2001） 青森県史 自然編 地学。

柴 正敏・前島秀人（2009） 千曳軽石層の帰属について、青森地学。

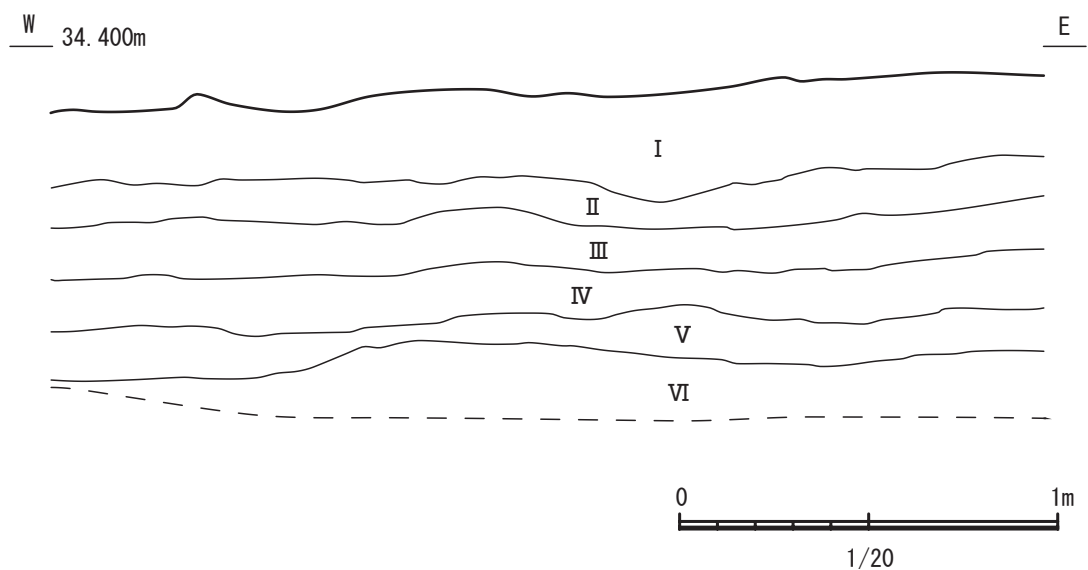
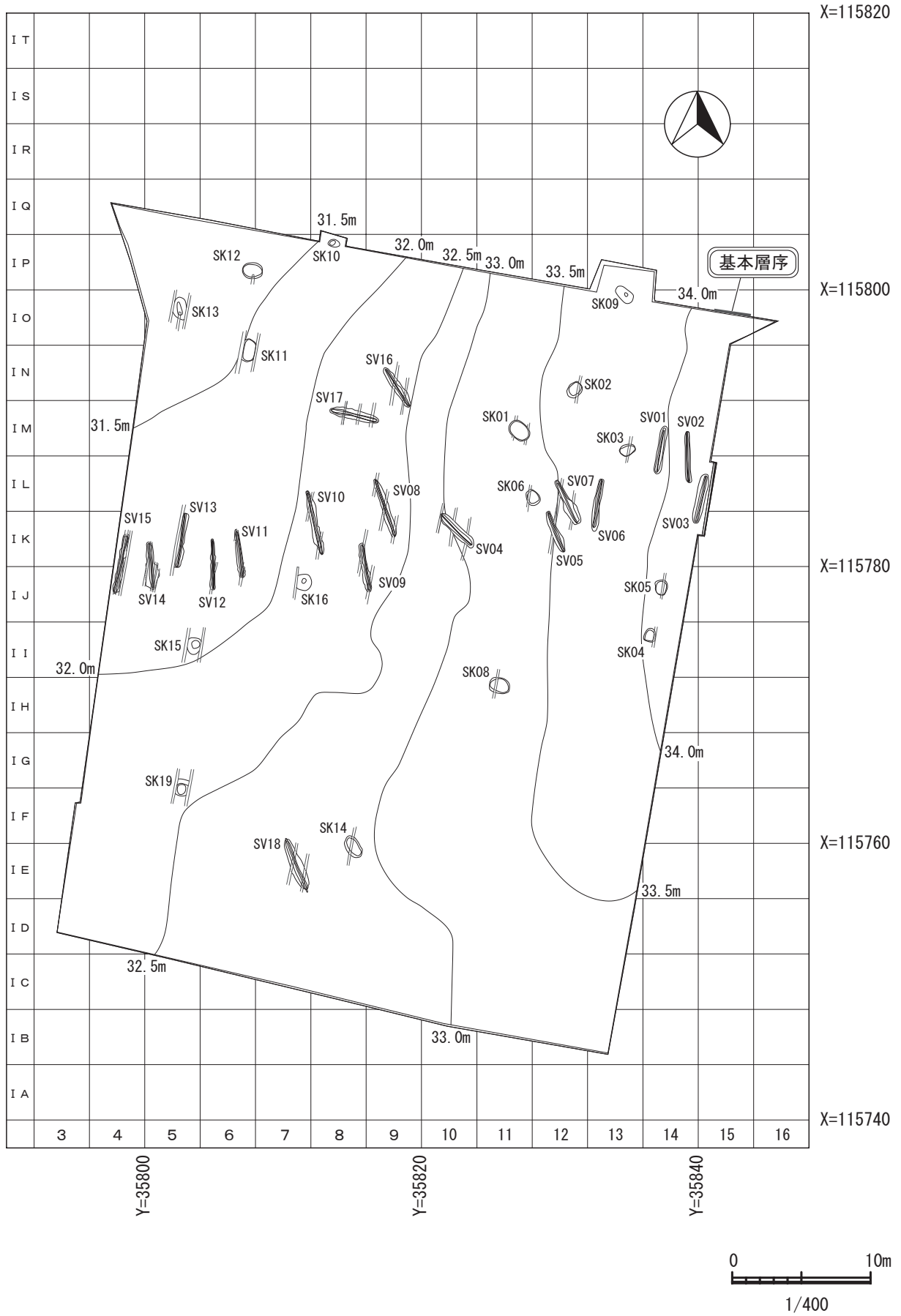


図5 基本層序



第6図 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 土坑

土坑は総数16基を検出した。以下に検出した遺構番号順に記載していく。なお、第7・17・18・20号土坑は欠番である。

第1号土坑(SK01)(図7)

[位置・確認] I M-11グリッドに位置している。標高33.0mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸105cm、短軸88cm、検出面からの深さは17cm、底面は平坦で壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第2号土坑(SK02)(図7)

[位置・確認] I N-12グリッドに位置している。標高33.2mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸111cm、短軸92cm、検出面からの深さは10cm、底面は皿形で壁面は緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 黒褐色土の単層である。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第3号土坑(SK03)(図7)

[位置・確認] I M-13グリッドに位置している。標高33.3mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸118cm、短軸82cm、検出面からの深さは20cm、底面は凹凸が見られ、壁面は垂直に立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] 剥片石器が出土している。

[小結] 詳細な時期は不明であるが縄文時代に帰属すると思われる。

第4号土坑(SK04)(図7)

[位置・確認] I I-14グリッドに位置している。標高33.5mの第V層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸98cm、短軸82cm、検出面からの深さは12cm、底面は皿形で壁面は緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。にぶい黄褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第5号土坑(SK05)(図7)

[位置・確認] I J-14グリッドに位置している。標高33.6mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸108cm、短軸87cm、検出面からの深さは18cm、底面はほぼ平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。

[堆積土] にぶい黄褐色土の単層である。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第6号土坑(SK06)(図7)

[位置・確認] I L-11・12グリッドに位置している。標高33.0mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸115cm、短軸93cm、検出面からの深さは18cm、底面は平坦で壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第8号土坑(SK08)(図7)

[位置・確認] I H-11グリッドに位置している。標高32.8mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸162cm、短軸113cm、検出面からの深さは15cm、底面は平坦で壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第9号土坑(SK09)(図7)

[位置・確認] I O・I P-13グリッドに位置している。標高33.5mの第V層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸146cm、短軸74cm、検出面からの深

さは49 cm、底面は丸みを帯び、壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第10号土坑 (SK10) (図7)

[位置・確認] I P-8グリッドに位置している。標高31.6 mの第Ⅲ層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸82 cm、短軸55 cm、検出面からの深さは27 cm、底面は丸みを帯び、壁面は緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第11号土坑 (SK11) (図8)

[位置・確認] I N・I O-6・7グリッドに位置している。標高31.5 mの第Ⅴ層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] トレンチャーにより東西の上端の一部を欠失しているが、平面形は楕円形と思われる。計測規模は開口部で長軸167 cm、短軸(87) cm、検出面からの深さは15 cm、底面はほぼ平坦で、壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。にぶい黄褐色土や黄褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第12号土坑 (SK12) (図8)

[位置・確認] I P-6・7グリッドに位置している。標高31.4 mの第Ⅴ層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸144 cm、短軸116 cm、検出面からの深さは11 cm、底面は平坦で壁面はやや外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。にぶい黄褐色土、黄褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第13号土坑 (SK13) (図8)

[位置・確認] I O-5グリッドに位置している。標高31.3 mの第Ⅴ層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] トレンチャーにより東西の上端の一部を欠失しているが、平面形は楕円形と思われる。

計測規模は開口部で長軸156cm、短軸(93)cm、検出面からの深さは42cm、底面は丸みを帯び、壁面は緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。暗褐色土、黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第14号土坑(SK14)(図8)

[位置・確認] I E・I F-8グリッドに位置している。標高32.8mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 平面形は楕円形である。計測規模は開口部で長軸170cm、短軸101cm、検出面からの深さは17cm、底面は平坦で壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土、黒色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第15号土坑(SK15)(図8)

[位置・確認] I I-5・6グリッドに位置している。標高31.9mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] トレンチャーにより東西の上端の一部を欠失しているが、平面形は円形と思われる。計測規模は開口部で長軸121cm、短軸(109)cm、検出面からの深さは41cm、底面は丸みを帯び、壁面は緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。黒色土、黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第16号土坑(SK16)(図8)

[位置・確認] I J-7・8グリッドに位置している。標高32.0mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] トレンチャーにより西側の上端の一部を欠失しているが、平面形は円形と思われる。計測規模は開口部で長軸118cm、短軸(106)cm、検出面からの深さは33cm、底面は平坦で壁面は外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土、明黄褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第19号土坑(SK19)(図8)

[位置・確認] I F・I G-5グリッドに位置している。標高31.4mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] トレンチャーにより東西の上端と中端を欠失しているが、平面形は楕円形と思われる。計測規模は開口部で長軸121cm、短軸(81)cm、検出面からの深さは28cm、底面は平坦で壁面はやや外側へ開きながら立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 詳細な時期は不明である。

第2節 溝状土坑

溝状土坑は総数18基を検出した。遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、形態とこれまでの調査事例から縄文時代中期後半から後期前葉の落とし穴と考えられる。段丘斜面の落ち際に並ぶように構築されている。以下に検出した遺構番号順に記載していく。

第1号溝状土坑(SV01)(図9)

[位置・確認] I L・I M-14グリッドに位置している。標高34mの第V層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸350cm、短軸65cm、底面で長軸303cm、短軸4cmである。検出面からの深さは95cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて南壁がほぼ垂直に立ち上がり、壁面上位で広がる形状である。北壁は広がりながら立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-10°-Eである。

[堆積土] 6層に分層した。黒褐色土、暗褐色土を主体とする。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第2号溝状土坑(SV02)(図9)

[位置・確認] I L・I M-14グリッドに位置している。標高33.6mの第V層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸369cm、短軸37cm、底面で長軸360cm、短軸6cmである。検出面からの深さは91cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、両壁面がほぼ垂直に立ち上がり、壁面上位で広がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-2°-Wである。

[堆積土] 5層に分層した。上層に黒褐色土、暗褐色土が堆積し、3層以下はにぶい黄褐色土、黄褐色土、にぶい黄橙色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第3号溝状土坑(SV03)(図9)

[位置・確認] I K・I L-14グリッドに位置している。標高33.6mの第V層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸361cm、短軸63cm、底面で長軸331cm、短軸9cmである。検出面からの深さは121cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて両壁面がほぼ垂直に立ち上がり、壁面上位で屈折して開口部に広がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-12°-Eである。

[堆積土] 7層に分層した。4層は黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第4号溝状土坑(SV04)(図9)

[位置・確認] IK-10グリッドに位置している。標高32.6mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸(449)cm、短軸70cm、底面で長軸308cm、短軸3cmである。検出面からの深さは110cmで、底面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて両壁面がほぼ垂直に立ち上がり、壁面中位で広がる形状である。短軸断面形はY字形状である。長軸方向はN-44°-Wである。

[堆積土] 6層に分層した。3～5層は暗褐色土、黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第5号溝状土坑(SV05)(図9)

[位置・確認] IK-12グリッドに位置している。標高33.0mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸313cm、短軸57cm、底面で長軸293cm、短軸8cmである。検出面からの深さは86cmで、底面は平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、両壁面がほぼ垂直に立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-22°-Wである。

[堆積土] 5層に分層した。4層は黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第6号溝状土坑(SV06)(図9)

[位置・確認] IK・IL-13グリッドに位置している。標高32.3mの第V層で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸380cm、短軸45cm、底面で長軸340cm、短軸9cmである。検出面からの深さは88cmで、底面は南側から北側に向かって傾斜している。

長軸断面形は底部から開口部に向けて、南壁がほぼ垂直に立ち上がり、壁面中位で屈折して開口部に広がる。北壁はほぼ垂直に立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-

8° -Eである。

[堆積土] 5層に分層した。3層は黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第7号溝状土坑 (SV07) (図10)

[位置・確認] I K・I L-12グリッドに位置している。標高33.2mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸348cm、短軸60cm、底面で長軸319cm、短軸9cmである。検出面からの深さは134cmで、底面は平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、南壁はほぼ垂直に立ち上がり上位で広がる形状である。北壁は広がりながら立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-26° -Wである。

[堆積土] 7層に分層した。3層は黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第8号溝状土坑 (SV08) (図10)

[位置・確認] I K・I L-12グリッドに位置している。標高32.2mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸438cm、短軸63cm、底面で長軸425cm、短軸10cmである。検出面からの深さは101cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は両壁面の中～下位にかけて、外方へ広がる袋状である。短軸断面形はY字形状である。長軸方向はN-19° -Wである。

[堆積土] 7層に分層した。3、5層に明黄褐色土やにぶい黄褐色土が含まれている。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第9号溝状土坑 (SV09) (図10)

[位置・確認] I J・I K-8・9グリッドに位置している。標高32.1mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸356cm、短軸40cm、底面で長軸327cm、短軸6cmである。検出面からの深さは128cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて両壁面がほぼ垂直に立ち上がり、壁面中位から上位で屈折して開口部に広がる形状である。短軸断面形はY字形状である。長軸方向はN-9° -Wである。

[堆積土] 6層に分層した。3～5層にはにぶい黄褐色土が多量に含まれている。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第10号溝状土坑 (SV10) (図10)

[位置・確認] I K・I L-7・8グリッドに位置している。標高32.0mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸472cm、短軸44cm、底面で長軸446cm、短軸9cmである。検出面からの深さは106cmで、底面は凹凸があり、中央部が高くなっている。

長軸断面形は底面から開口部に向けて、両壁面が広がり立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-13°-Wである。

[堆積土] 7層に分層した。3、5層に明黄褐色土やにぶい黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第11号溝状土坑 (SV11) (図10)

[位置・確認] I J・I K-6グリッドに位置している。標高31.9mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸346cm、短軸42cm、底面で長軸326cm、短軸5cmである。検出面からの深さは81cmで、底面はほぼ平坦であるが、中央南側から下方に傾斜している。長軸断面形は底面から開口部から向けて、南壁がほぼ垂直に立ち上がる。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で広がりながら立ち上がる形状である。短軸断面形はY字形状である。長軸方向はN-8°-Wである。

[堆積土] 5層に分層した。2、4層に明黄褐色土やにぶい黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第12号溝状土坑 (SV12) (図10)

[位置・確認] I J・I K-6グリッドに位置している。標高31.8mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸368cm、短軸27cm、底面で長軸342cm、短軸4cmである。検出面からの深さは79cmで、底面は平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、両壁面がほぼ垂直に立ち上がり上位で広がり立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-1°-Wである。

[堆積土] 4層に分層した。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第13号溝状土坑 (SV13) (図11)

[位置・確認] I J・I K-5グリッドに位置している。標高31.8mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸396cm、短軸39cm、底面で長軸383cm、

短軸7cmである。検出面からの深さは81cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、両壁面がほぼ垂直に立ち上がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-8°-Eである。

[堆積土]5層に分層した。2～4層に明黄褐色土やにぶい黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結]詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第14号溝状土坑(SV14)(図11)

[位置・確認]I J・I K-5グリッドに位置している。標高31.9mの第5層で確認した。

[重複]トレンチャーと重複している。

[形状・規模]不整形状を呈している。計測規模は開口部で長軸331cm、短軸50cm、底面で長軸312cm、短軸7cmである。検出面からの深さは100cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、南壁は広がり立ち上がる形状である。北壁はほぼ垂直に立ち上がり壁面中位で広がる形状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-5°-Wである。

[堆積土]6層に分層した。3層以下に明黄褐色土やにぶい黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と思われる。

[小結]詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第15号溝状土坑(SV15)(図11)

[位置・確認]I J・I K-4グリッドに位置している。標高31.8mの第V層で確認した。

[重複]トレンチャーと重複している。

[形状・規模]細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸(435)cm、短軸30cm、底面で長軸421cm、短軸3cmである。検出面からの深さは93cmで、底面は凹凸が見られる。長軸断面形は両壁面の中一下位にかけて外側へ広がる袋状である。短軸断面形はV字形状である。長軸方向はN-12°-Eである。

[堆積土]5層に分層した。3層に黄褐色土が堆積しており、壁の崩落土と考えられる。自然堆積と考えられる。

[小結]詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第16号溝状土坑(SV16)(図11)

[位置・確認]I M・I N-4グリッドに位置している。標高32.5mの第V層で確認した。

[重複]トレンチャーと重複している。

[形状・規模]細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸333cm、短軸61cm、底面で長軸303cm、短軸4cmである。検出面からの深さは142cmで、底面は平坦である。長軸断面形は底面から開口部に向けて、両壁面がほぼ垂直に立ち上がる形状である。短軸断面形は底面からV字形状である。長軸方向はN-33°(W)-Sである。

[堆積土]7層に分層した。2層に黄褐色土が堆積している。壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第17号溝状土坑 (SV17) (図11)

[位置・確認] I M-8・9グリッドに位置している。標高32.3mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸361cm、短軸67cm、底面で長軸347cm、短軸14cmである。検出面からの深さは91cmで、底面は平坦である。長軸断面形は両壁面の中～下位にかけて、外側へ広がる袋状である。短軸断面形はY字形状である。長軸方向はN-76°-Wである。

[堆積土] 5層に分層した。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第18号溝状土坑 (SV18) (図11)

[位置・確認] I E・I F-7グリッドに位置している。標高32.4mの第V層で確認した。

[重複] トレンチャーと重複している。

[形状・規模] 楕円形を呈している。計測規模は開口部で長軸389cm、短軸98cm、底面で長軸419cm、短軸9cmである。検出面からの深さは141cmで、底面は中央部から両端部に向かって上方に傾斜している。長軸断面形は両壁面の中～下位にかけて、外側へ広がる袋状である。短軸断面形はY字形状である。長軸方向はN-22°-Wである。

[堆積土] 7層に分層した。3～6層は褐色土が堆積しており、壁の崩落土と考えられ、自然堆積と考えられる。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

(齋藤・藤田)

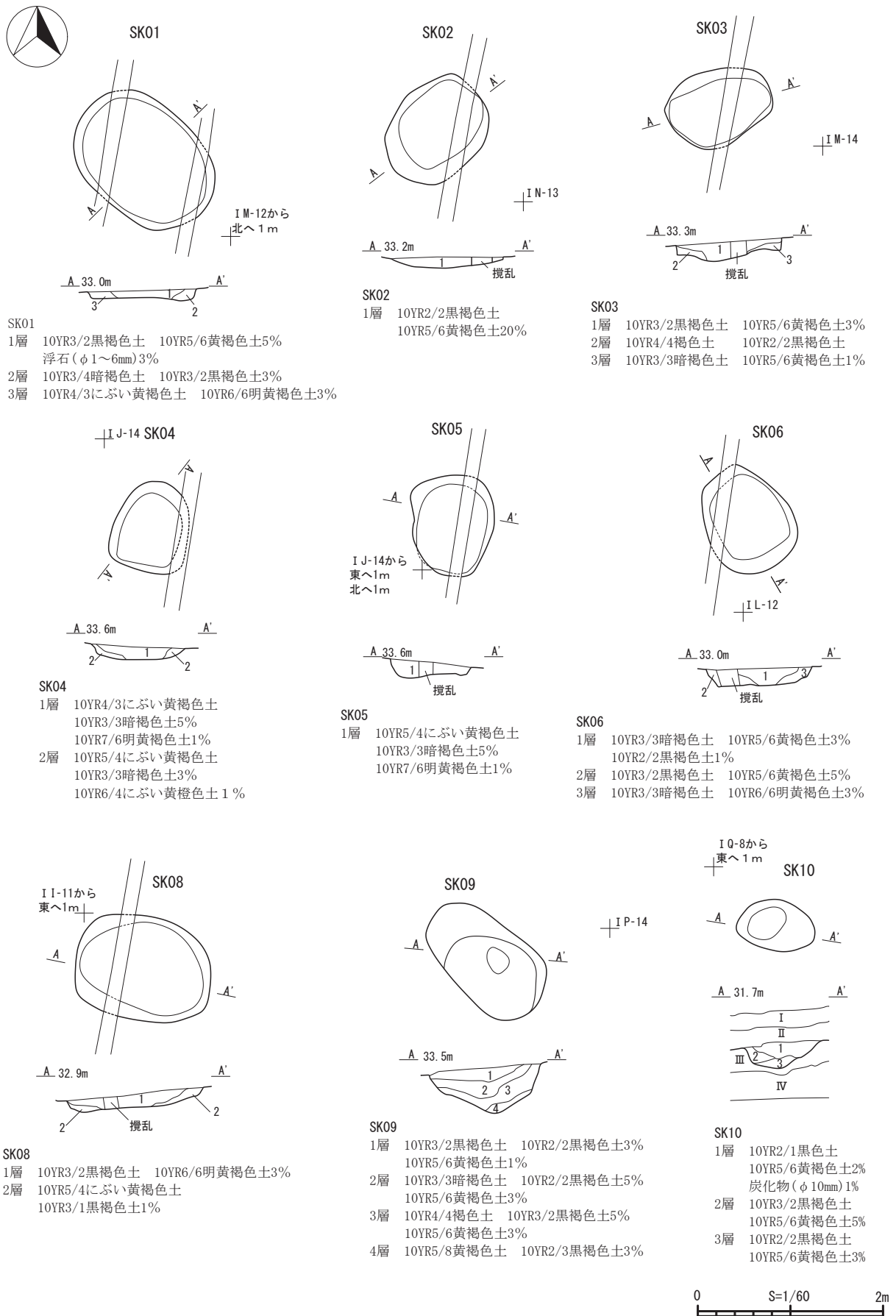


図7 土坑(1)

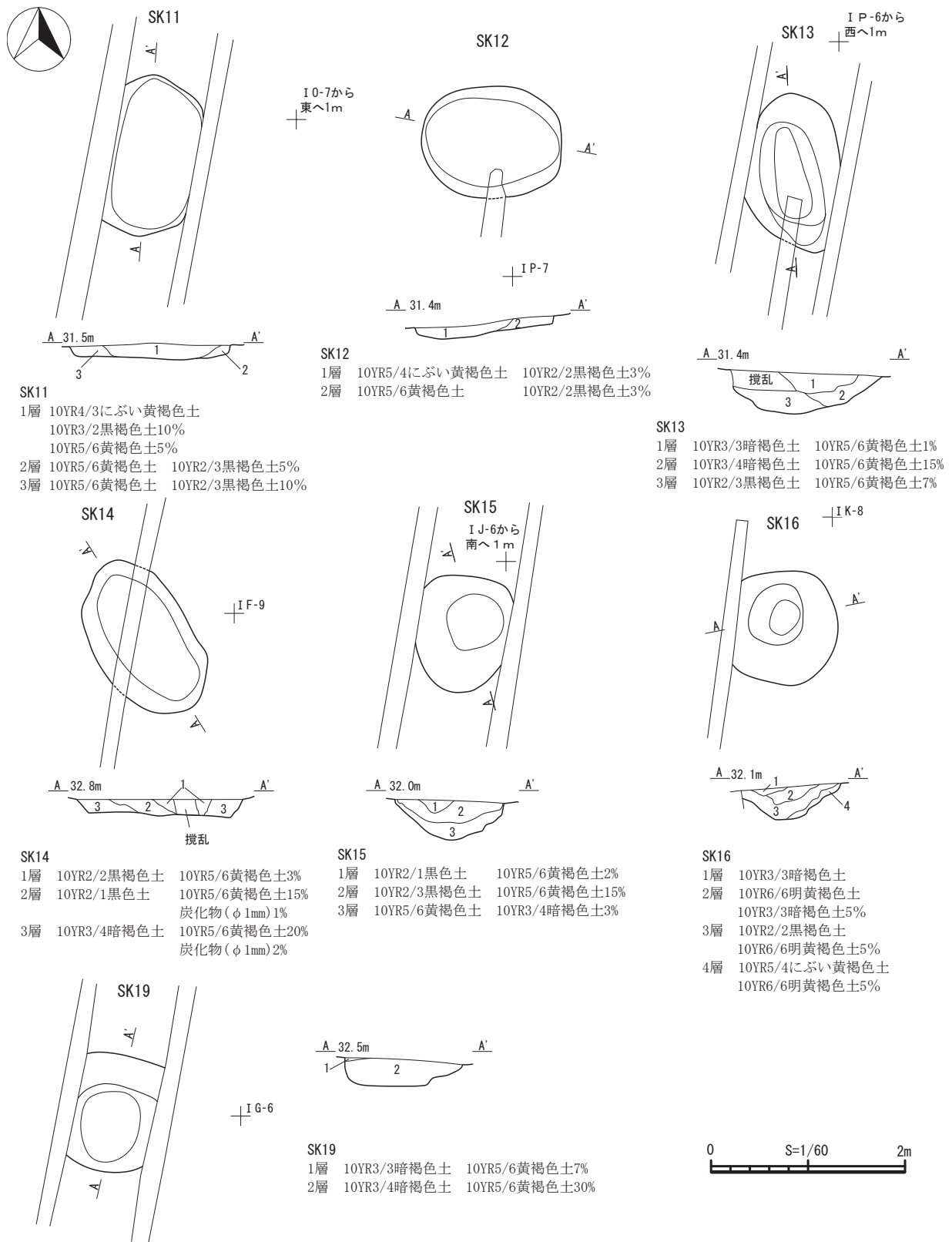


図8 土坑（2）

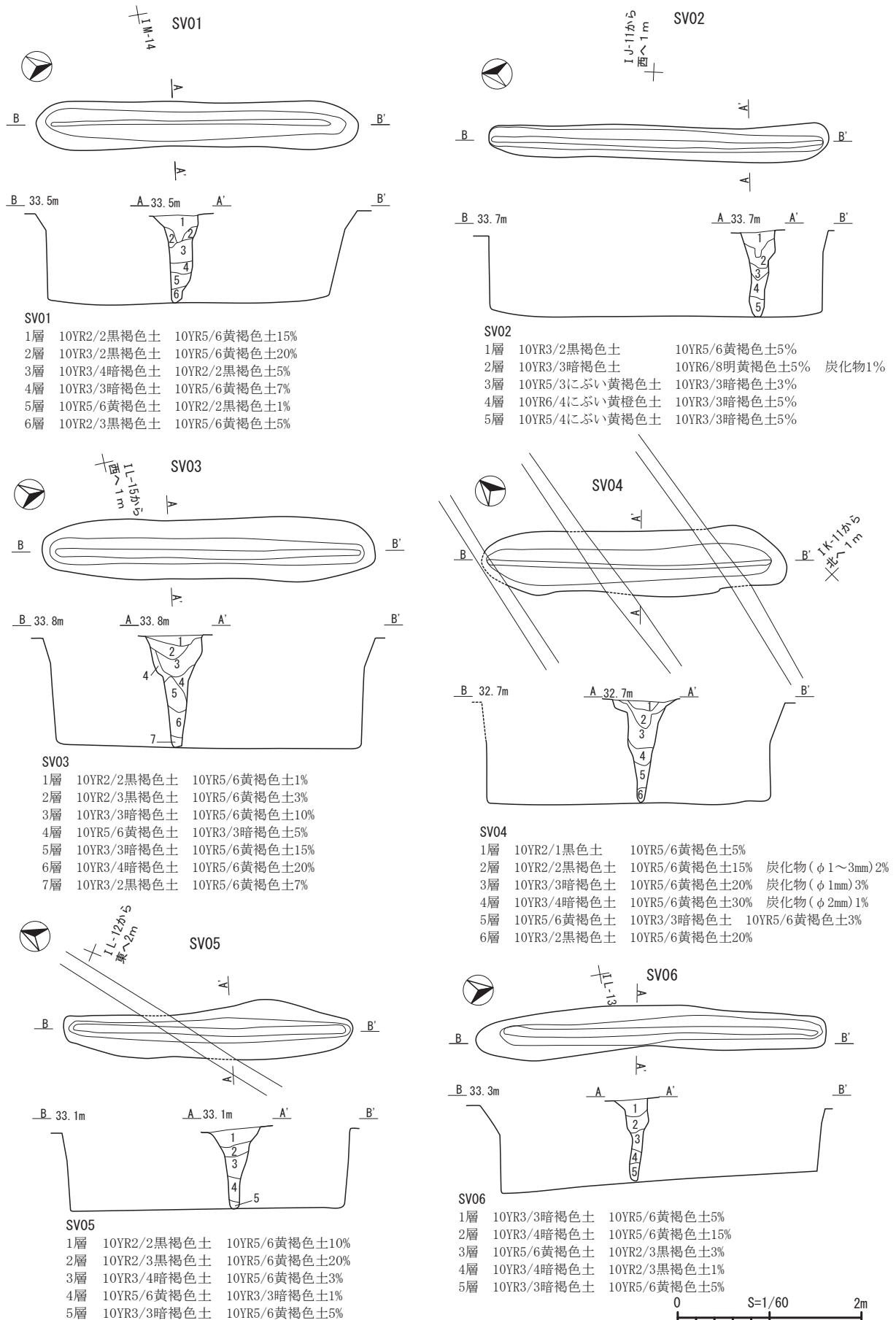


図9 溝状土坑(1)

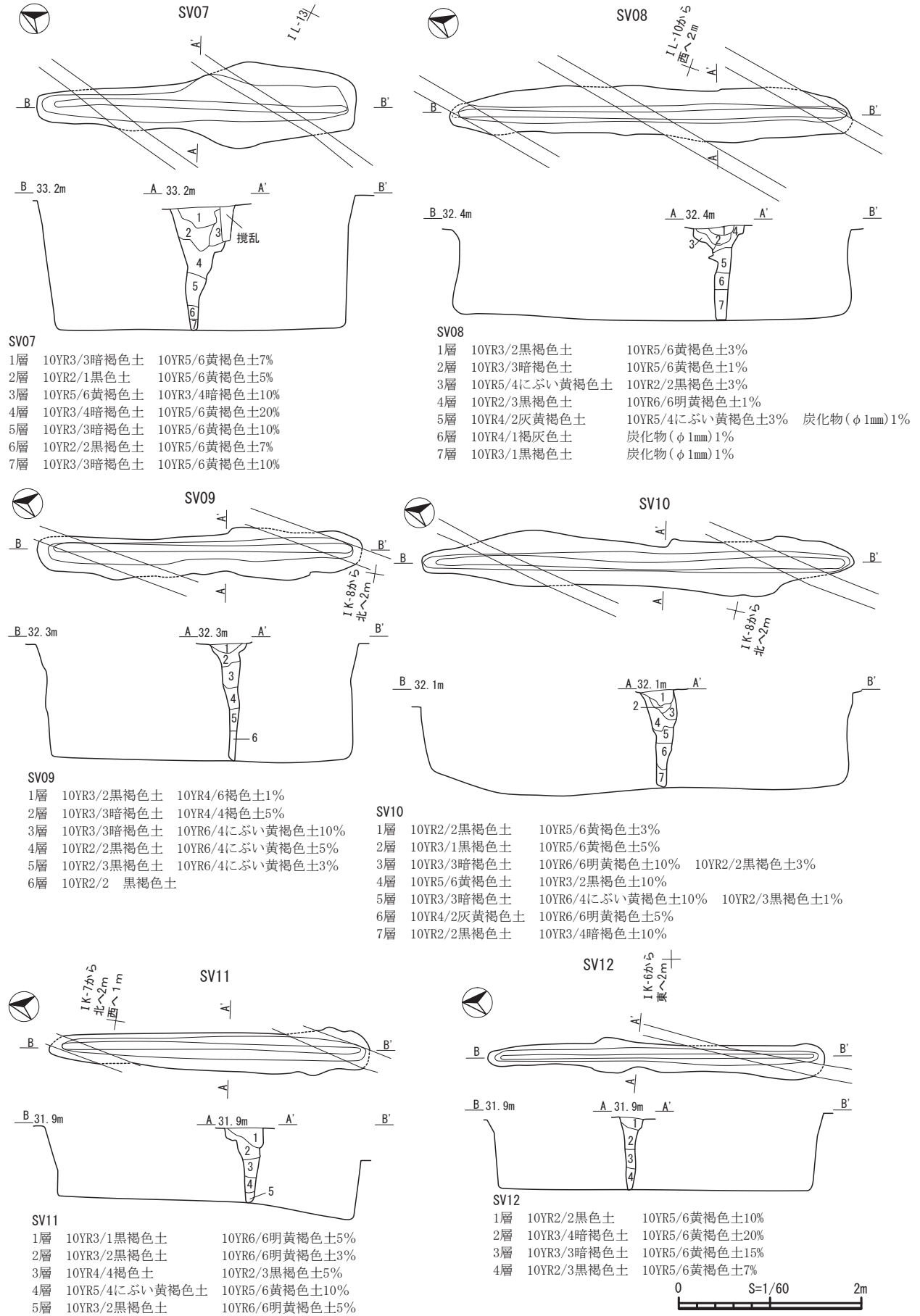
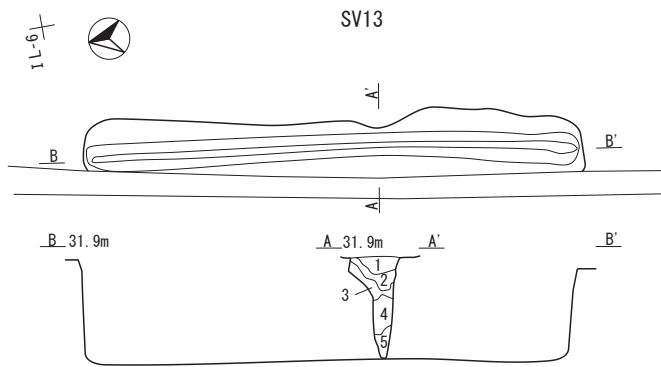
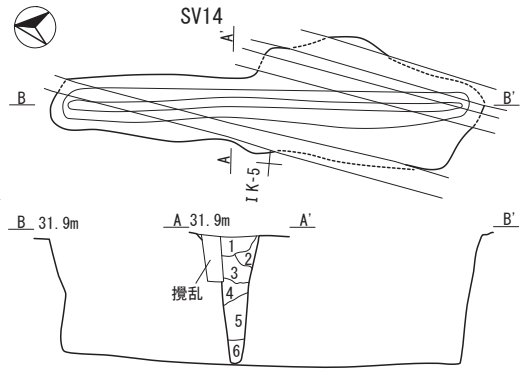


図10 溝状土坑（2）



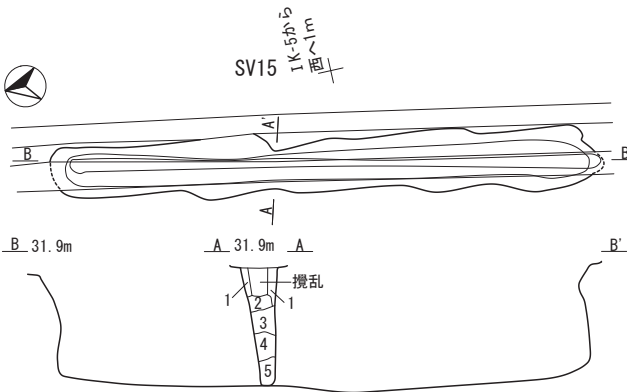
SV13

- | | | |
|----|----------------|------------------|
| 1層 | 10YR3/2黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土10% |
| 2層 | 10YR4/3にぶい黄褐色土 | 10YR2/2黒褐色土1% |
| 3層 | 10YR6/6明黄褐色土 | 10YR2/3黒褐色土5% |
| 4層 | 10YR4/2灰黄褐色土 | 10YR6/4にぶい黄褐色土3% |
| 5層 | 10YR3/2黒褐色土 | 10YR5/4にぶい黄褐色土1% |



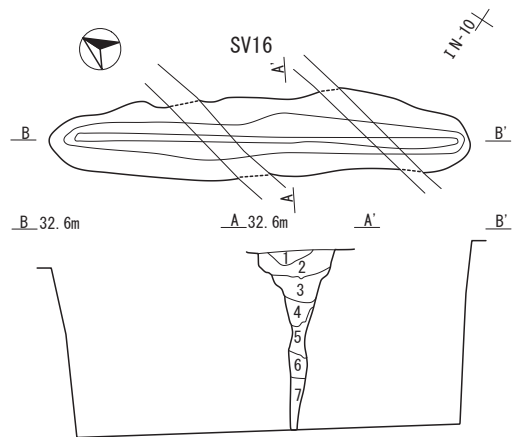
SV14

- | | | |
|----|--------------|----------------|
| 1層 | 10YR3/1黒褐色土 | 10YR6/8明黄褐色土1% |
| 2層 | 10YR4/4褐色土 | 10YR3/3暗褐色土10% |
| 3層 | 10YR3/2黒褐色土 | 10YR6/8明黄褐色土5% |
| 4層 | 10YR4/2灰黄褐色土 | 10YR6/6明黄褐色土5% |
| 5層 | 10YR7/6明黄褐色土 | 10YR3/3暗褐色土3% |
| | | 炭化物(φ1~5mm)1% |
| 6層 | 10YR3/2暗褐色土 | 10YR6/6明黄褐色土5% |



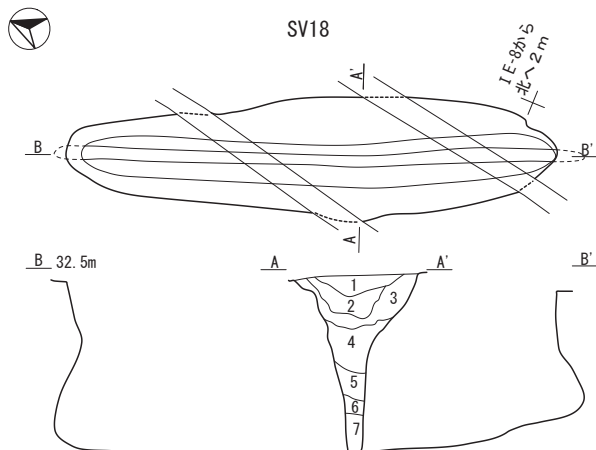
SV15

- | | | |
|----|-------------|----------------|
| 1層 | 10YR3/4暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土15% |
| 2層 | 10YR3/3暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土7% |
| 3層 | 10YR5/6黄褐色土 | 10YR3/4褐色土7% |
| 4層 | 10YR3/4暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土10% |
| 5層 | 10YR2/3黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土10% |



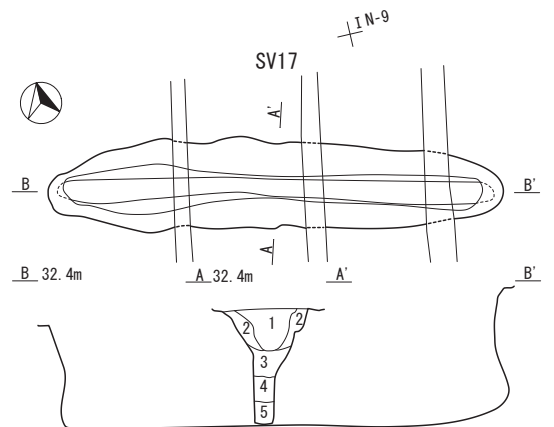
SV16

- | | | | |
|----|-------------|----------------|---------------|
| 1層 | 10YR2/3黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土3% | 10YR2/2黒褐色土2% |
| 2層 | 10YR3/4暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土7% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 3層 | 10YR3/3暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土5% | |
| 4層 | 10YR2/3黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土10% | |
| 5層 | 10YR3/4暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土20% | |
| 6層 | 10YR2/2黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土5% | |
| 7層 | 10YR5/6黄褐色土 | 10YR3/4褐色土10% | |



SV18

- | | | | |
|----|-------------|----------------|-------------|
| 1層 | 10YR2/1黒色土 | 10YR5/6黄褐色土7% | |
| 2層 | 10YR2/2黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土10% | |
| 3層 | 10YR2/3黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土15% | |
| 4層 | 10YR3/3褐色土 | 10YR5/6黄褐色土20% | |
| 5層 | 10YR3/4褐色土 | 10YR5/6黄褐色土25% | 炭化物(φ3mm)1% |
| 6層 | 10YR3/3褐色土 | 10YR5/6黄褐色土7% | |
| 7層 | 10YR2/3黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土5% | |



SV17

- | | | | |
|----|-------------|----------------|-------------|
| 1層 | 10YR2/2黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土7% | 炭化物(φ2mm)1% |
| 2層 | 10YR3/2黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土20% | |
| 3層 | 10YR3/3暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土15% | |
| 4層 | 10YR3/4暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土30% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 5層 | 10YR3/3暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色土25% | 炭化物(φ1mm)2% |

図11 溝状土坑(3)

第3節 出土遺物

出土遺物は土器と石器あわせて段ボール箱1箱の出土であった。土器は全て遺構外でトレンチャーによる攪乱内からの出土である。石器は第3号土坑と遺構外から出土した。

1 土器（図12）

1～5は甕と考えられる。1は口縁部片で口縁端に刻みが見られる。RL、平行沈線が施される。2は胴部片でRL、平行沈線が施される。1、2は共に色調が黒褐色であり同一個体の可能性が高い。3～5は胴部片である。3は平行沈線、RLが施される。4、5はRLが施される。弥生時代中期から後期に位置付けられる。

2 石器（図12）

6は第3号土坑から出土した搔器である。1側縁に裏面から急角度の剥離を施している。石質は珪質頁岩である。2は玉髓製の石鏃である。基部を欠損している。 (齋藤・藤田)

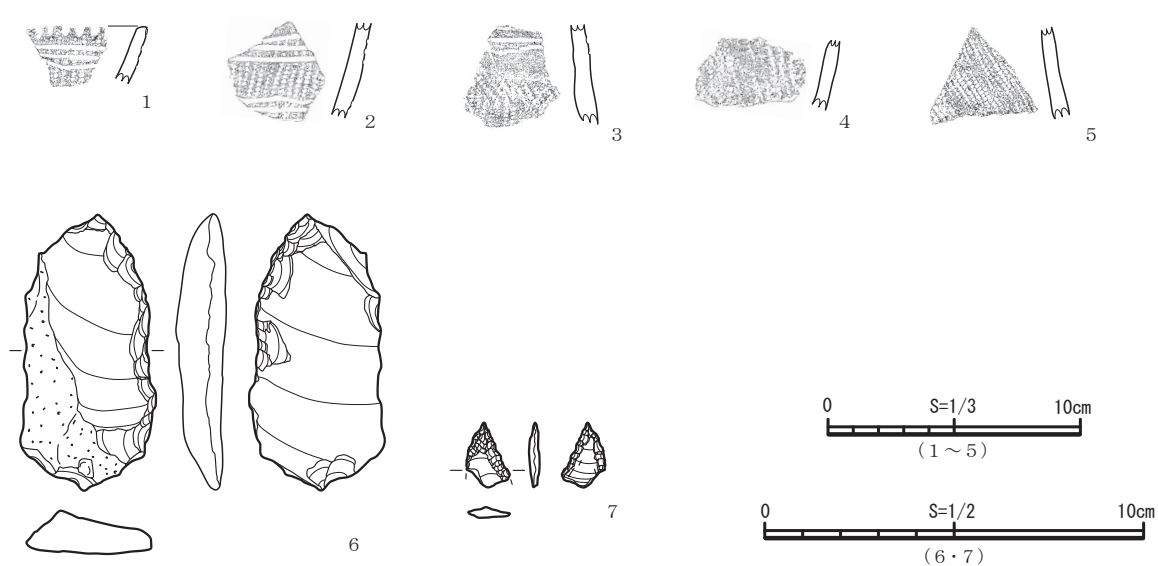


図12 出土遺物

第4章 総括

溝状土坑について

百目木（3）遺跡において溝状土坑が18基検出された。溝状土坑の用途は、狩猟用の落とし穴であると考えられ、対象の動物は鹿と考えられている。

溝状土坑は青森県内では東部に多く西部に少ない「西低東高」の状況が指摘されている（福田2018ほか）。同じ下北半島にあり横浜町に隣接する六ヶ所村においては、発茶沢（1）遺跡（青森県教育委員会1989）のような検出数が100基を超える遺跡が見られ、溝状土坑による狩猟が盛んに行われていたと考えられる。

本遺跡では溝状土坑列が調査区外に続いている状況が見られ、段丘上に多数の溝状土坑が設置されていたと考えられる（巻頭図版、図13、写真14）。近年、横浜町内では横浜北・横浜南バイパス建設事業に伴い林ノ脇遺跡（青森県教育委員会2021）や吹越（2）遺跡（2020年度発掘調査、2021年度報告書刊行予定）で溝状土坑が検出されており、検出数は増加している。

〈形態・規模〉

本遺跡の溝状土坑の計測値は開口部長軸293～420 cm、短軸26～102 cm、深さ70～156 cmで、大きさからみると長軸は300～320 cmが比較的多い。短軸は80 cmを超えるものは1基（第18号溝状土坑）のみで、それ以外は80 cm以内である。深さは90 cm以上が多い。

〈配置〉

溝状土坑の分布は南北に分かれる。SV01～17の17基は北側、SV18の1基のみが南側に配置されている。18基のうち主軸方向は真北から西に傾くものが7割を占める。

〈時期〉

溝状土坑から出土遺物はなく、年代測定も行っていないことから、本遺跡の溝状土坑の詳細な時期は不明である。福田友之氏によれば、青森県内の溝状土坑の時期は重複関係等から縄文時代中期～後期前葉とされている（福田2018）。本遺跡から検出した溝状土坑も形態は同様であることから、近い時期に属すると推察される。北側の列の中でSV01・03・06、SV09・11、SV13・15は主軸方位が類似しており、同時期の存在が考えられる。SV09・11は下端の長軸の長さが近似していることから同時期の可能性が非常に高い。SV18は開口部短軸や下端の長軸が長いことや1基のみ離れていることから他の17基と時期が異なる可能性が高い。

〈居住域との関係〉

今村啓爾氏によれば落とし穴の設置場所と設置者の居住地の関係という問題も十分な成果が得られていないと指摘されている（今村2019）。これまで下北半島では発掘調査事例が少なく、百目木（3）遺跡周辺では縄文時代中期～後期前葉の集落跡は確認されていない。図3と表1を見ると、百目木（3）遺跡が立地する牛ノ沢川流域において縄文時代中期～後期に登録されている遺跡が存在している。発掘調査が行われていないので想像の域ではあるが、これらの遺跡に生活した人々が溝状土坑を設置した可能性が考えられる。

（齋藤・藤田）



図13 溝状土坑配置図

引用・参考文献

- 青森県2005『青森県史 資料編 考古Ⅲ 弥生～古代』
- 青森県教育委員会1983『青森県の中世城館』
- 青森県教育委員会1973『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 青森県教育委員会1984『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第82集
- 青森県教育委員会1985『大石平遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第90集
- 青森県教育委員会1987『大石平遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第103集
- 青森県教育委員会1988『発茶沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第116集
- 青森県教育委員会1989『発茶沢(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第120集
- 青森県教育委員会1994『家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第160集
- 青森県教育委員会1994『青森県遺跡詳細分布報告書Ⅵ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第165集
- 青森県教育委員会1997『青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅸ』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第227集
- 青森県教育委員会2000『モダシ平遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第271集
- 青森県教育委員会2000『岩ノ沢平遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第287集
- 青森県教育委員会2021『林ノ脇遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第620集
- 今村啓爾2019「総論 陥し穴研究の展開」『月刊考古学ジャーナル』12月号
- 角鹿扇三・渡辺兼庸1980『角鹿扇三蒐集考古学資料集』
- 福田友之・工藤清泰・木村浩一1986「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日市館・横浜町牛ノ沢館等発見の陶磁資料」『弘前大学考古学研究』3
- 福田友之2018『東北北部先史文化の考古学』同成社
- 藤原秀樹2013「Tピットについて」『北海道考古学』第49号
- 藤原秀樹2018「北海道のTピットについて(続)」『様似郷土館紀要創刊号』
- 藤原秀樹2019「北日本の動物相と陥し穴」『月刊考古学ジャーナル』12月号
- 横浜町教育委員会1983『桧木遺跡発掘調査報告書』

遺構計測表

表2 土坑計測表

遺構名	位置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
SK01	I M-11	105	88	17	
SK02	I N-12	111	92	10	
SK03	I M-13	118	82	20	石器出土
SK04	I I -14	98	82	12	
SK05	I J -14	108	87	18	
SK06	I L-11・12	115	93	18	
SK08	I H-11	162	113	15	
SK09	I O・I P-13	146	74	49	
SK10	I P- 8	82	55	27	
SK11	I N・I O-6・7	167	(87)	15	
SK12	I P-6・7	144	116	11	
SK13	I O-5	156	(93)	42	
SK14	I E・I F-8	170	101	17	
SK15	I I -5・6	121	(109)	41	
SK16	I J -7・8	118	(106)	33	
SK19	I F・I G-5	121	(81)	28	

表3 溝状土坑計測表

遺構名	位置	長軸方向	開口部(上端)長軸 (cm)	開口部(上端)短軸 (cm)	坑底部(下端)長軸 (cm)	坑底部(下端)短軸 (cm)	深さ(cm)
SV01	I L・I M-14	N-10° -E	350	65	303	4	95
SV02	I L・I M-14	N- 2° -W	369	37	360	6	91
SV03	I K・I L-14	N-12° -E	361	63	331	9	121
SV04	I K-10	N-44° -W	(449)	70	308	3	110
SV05	I K-12	N-22° -W	313	57	293	8	86
SV06	I K・I L-13	N- 8° -E	380	45	340	9	88
SV07	I K・I L-12	N-26° -W	348	60	319	9	134
SV08	I K・I L-12	N-19° -W	438	63	425	10	101
SV09	I J・I K-8・9	N- 9° -W	356	40	327	6	128
SV10	I K・I L-7・8	N-13° -W	472	44	446	9	106
SV11	I J・I K-6	N- 8° -W	346	42	326	5	81
SV12	I J・I K-6	N- 1° -W	368	27	342	4	79
SV13	I J・I K-5	N- 8° -E	396	39	383	7	81
SV14	I J・I K-5	N- 5° -W	331	50	312	7	100
SV15	I J・I K-4	N-12° -E	(435)	30	421	3	93
SV16	I M・I N-4	N-33° -W	333	61	303	4	142
SV17	I M-8・9	N-76° -W	361	67	347	14	91
SV18	I E・I F-7	N-22° -W	389	98	419	9	141

遺物観察表

表4 土器観察表

図	番号	出土位置	器種	部位	文様	時期	
12	1	I G- 9	攪乱	甕	口縁部	刻み、RL斜回、平行沈線	弥生時代中期～後期
12	2	I G- 9	攪乱	甕	胴部	RL斜回、平行沈線	弥生時代中期～後期
12	3	I F- 7	攪乱	甕	胴部	RL斜回、平行沈線	弥生時代中期～後期
12	4	I D-11	攪乱	甕	胴部	RL斜回	弥生時代中期～後期
12	5	I F- 8	攪乱	甕	胴部	RL斜回	弥生時代中期～後期

表5 石器観察表

図	番号	出土位置	器種	石質	計測値 長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)	重量
12	6	SK03 1層	搔器	珪質頁岩	73×36×19	34.2g
12	7	I B-10 I層	石鏃	玉髓	(18)×11×3	6.0g



調査区遠景（南東から）



調査区遠景（北東から）

写真図版 1 調査区遠景



調査区近景（南東から）



基本層序（南から）

写真図版2 調査区近景・基本層序



調査状況（北から）



調査状況（南から）

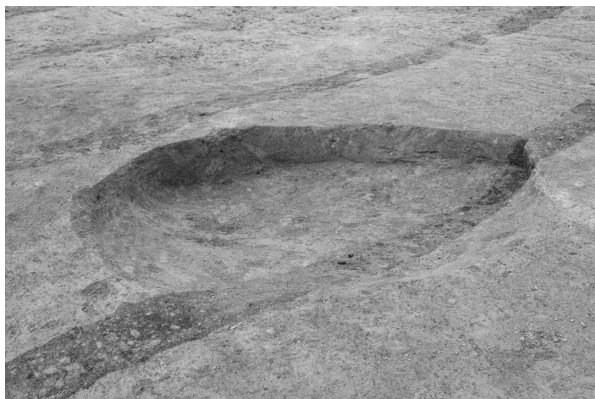
写真図版3 調査状況



第1号土坑 完掘(南東から)



第1号土坑 断面(南東から)



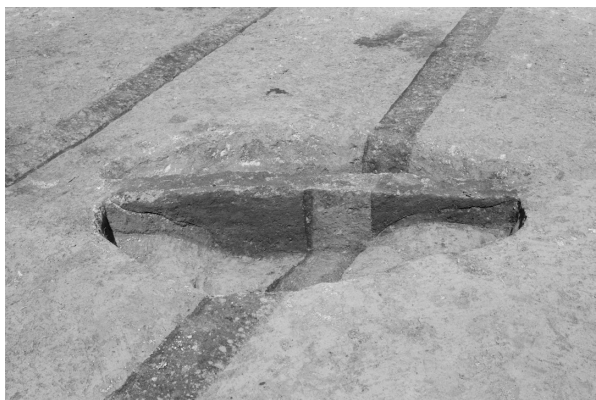
第2号土坑 完掘(南東から)



第2号土坑 断面(南東から)



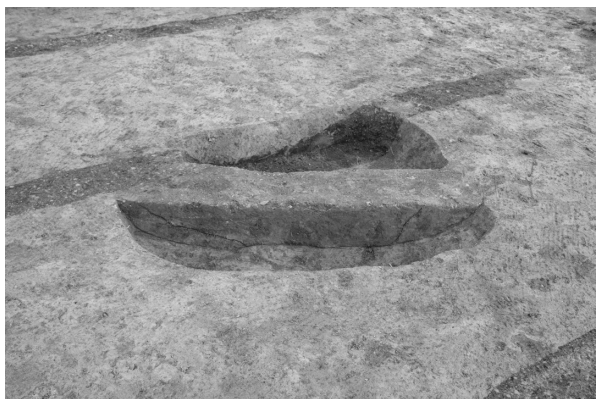
第3号土坑 完掘(南東から)



第3号土坑 断面(南東から)

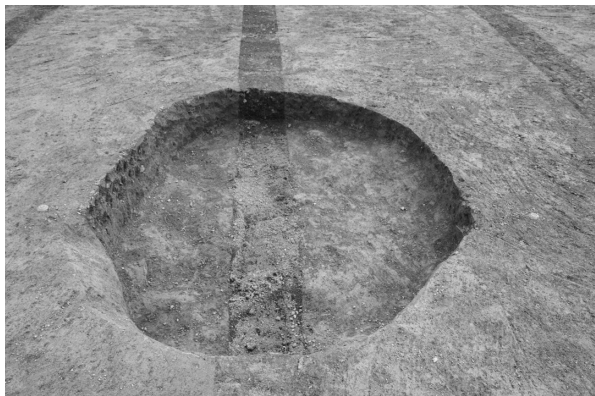


第4号土坑 完掘(北西から)

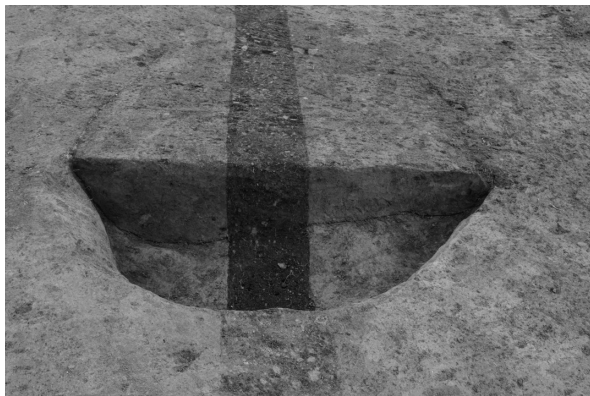


第4号土坑 断面(北西から)

写真図版4 土坑(1)



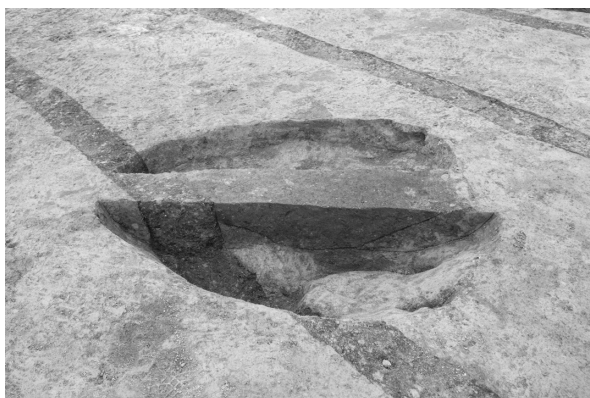
第5号土坑 完掘（南から）



第5号土坑 断面（南から）



第6号土坑 完掘（南西から）



第6号土坑 断面（南西から）



第8号土坑 完掘（南から）



第8号土坑 断面（南から）



第9号土坑 完掘（南から）



第9号土坑 断面（南から）

写真図版5 土坑（2）



第10号土坑 完掘(南から)



第10号土坑 断面(南から)



第11号土坑 完掘(東から)



第11号土坑 断面(東から)



第12号土坑 完掘(南から)



第12号土坑 断面(南から)



第13号土坑 完掘(東から)



第13号土坑 断面(東から)

写真図版6 土坑(3)



第14号土坑 完掘（北東から）



第14号土坑 断面（北東から）



第15号土坑 完掘（北東から）



第15号土坑 断面（北東から）



第16号土坑完掘（南から）



第16号土坑 断面（南から）



第19号土坑 完掘（東から）



第19号土坑 断面（東から）

写真図版7 土坑（4）



第1号溝状土坑 完掘(南から)



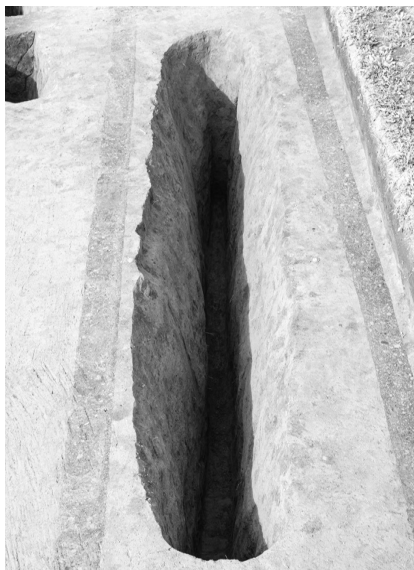
第1号溝状土坑 断面(南から)



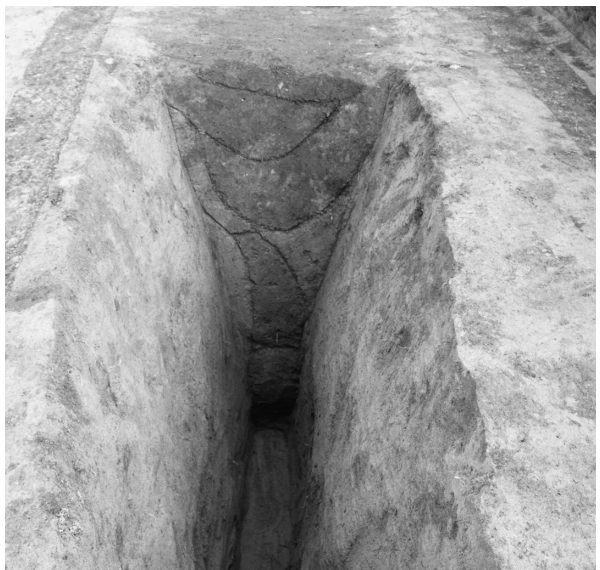
第2号溝状土坑 完掘(南から)



第2号溝状土坑 断面(南から)

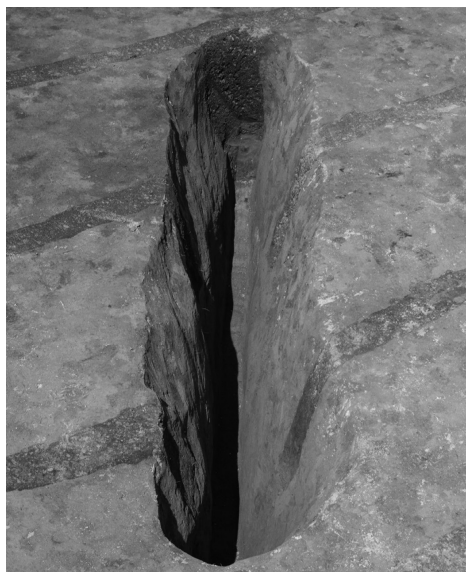


第3号溝状土坑 完掘(南から)

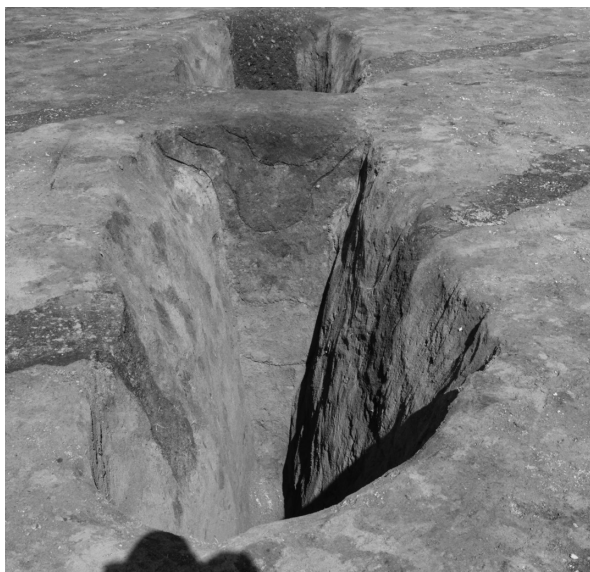


第3号溝状土坑 断面(南から)

写真図版8 溝状土坑(1)



第4号溝状土坑 完掘(南東から)



第4号溝状土坑 断面(南東から)



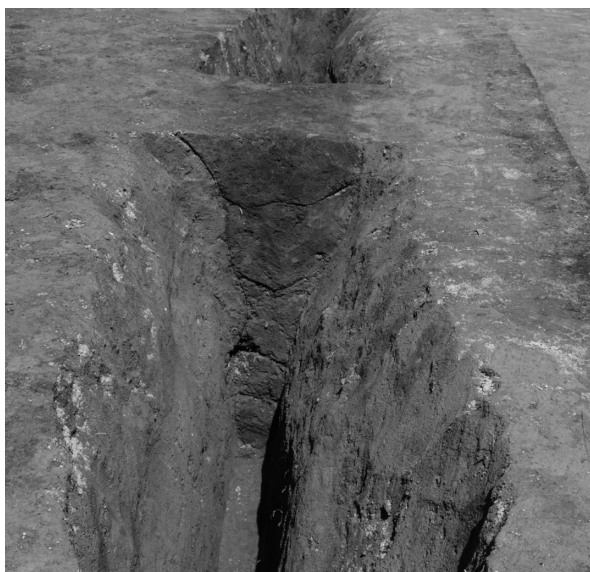
第5号溝状土坑 完掘(南東から)



第5号溝状土坑 断面(南東から)



第6号溝状土坑 完掘(南から)



第6号溝状土坑 断面(南から)

写真図版9 溝状土坑(2)



第7号溝状土坑 完掘(南東から)



第7号溝状土坑 断面(南東から)



第8号溝状土坑 完掘(南東から)



第8号溝状土坑 断面(南東から)



第9号溝状土坑 完掘(南から)



第9号溝状土坑 断面(南から)

写真図版10 溝状土坑(3)



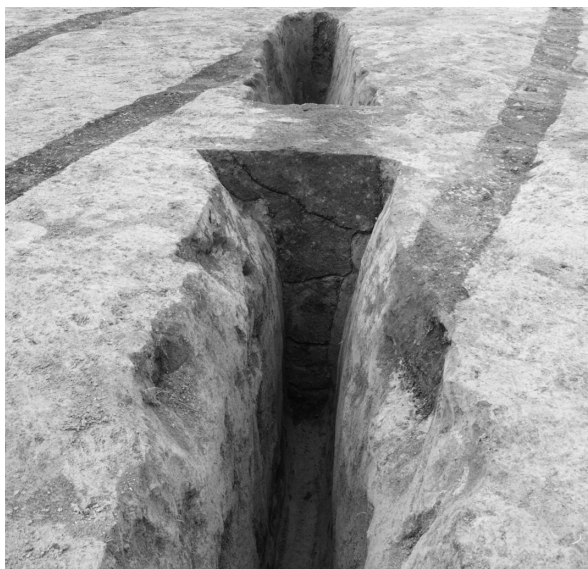
第10号溝状土坑 完掘（南東から）



第10号溝状土坑 断面（南東から）



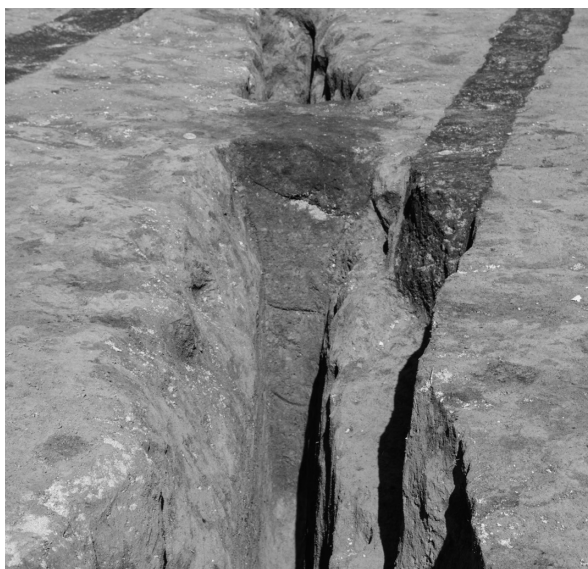
第11号溝状土坑 完掘（南から）



第11号溝状土坑 断面（南から）



第12号溝状土坑 完掘（南から）



第12号溝状土坑 断面（南から）

写真図版11 溝状土坑（4）



第13号溝状土坑 断面(南から)



第14号溝状土坑 完掘(南から)



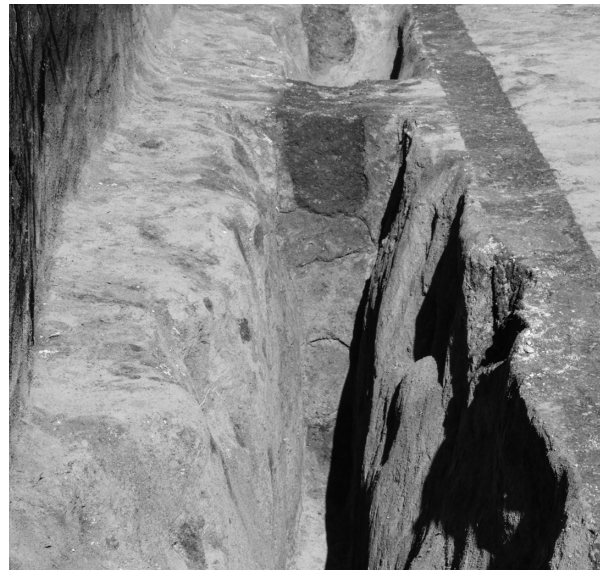
第14号溝状土坑 断面(南から)



第13(右)・14(左)号溝状土坑 完掘(南から)



第15号溝状土坑 完掘(南から)



第15号溝状土坑 断面(南から)

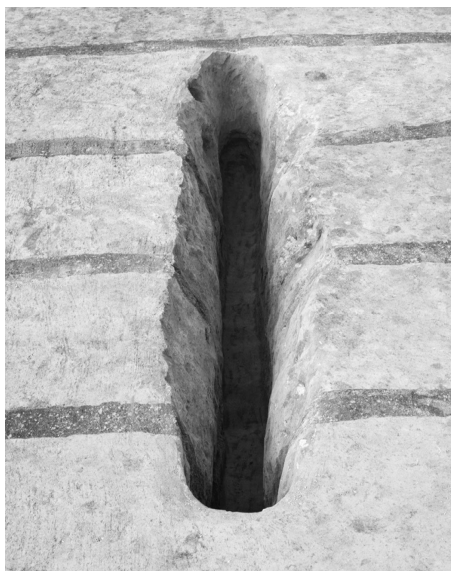
写真図版12 溝状土坑(5)



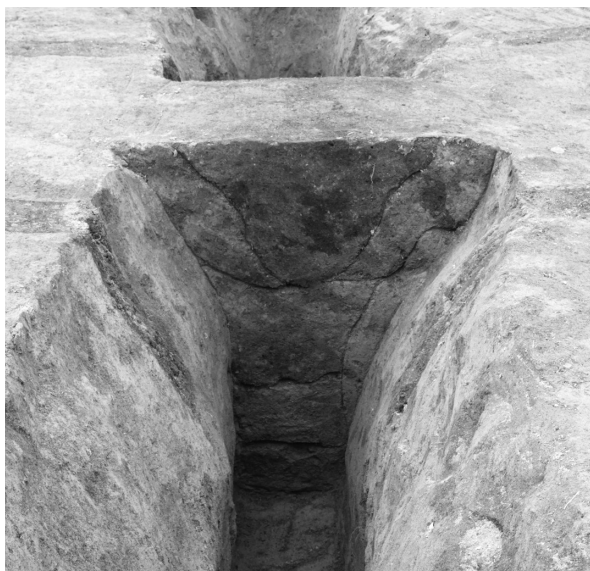
第16号溝状土坑 完掘（南東から）



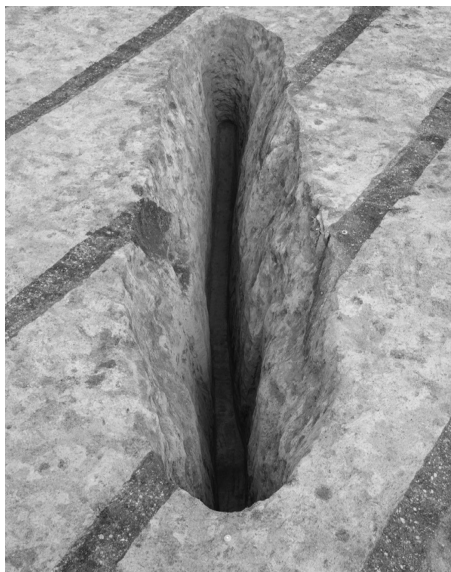
第16号溝状土坑 断面（南東から）



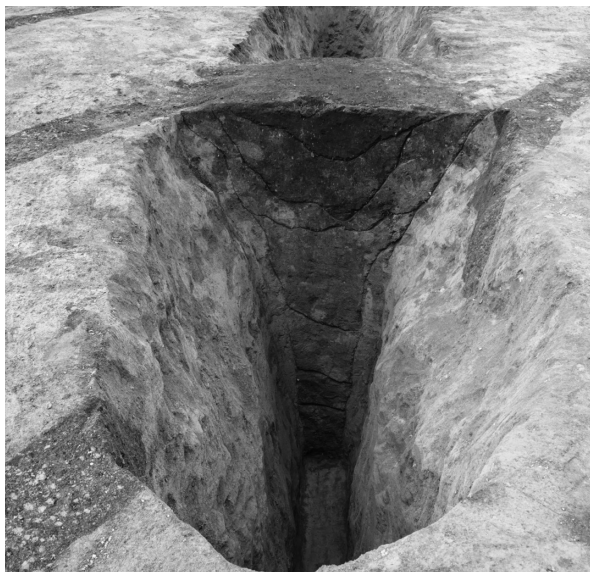
第17号溝状土坑 完掘（東から）



第17号溝状土坑 断面（東から）



第18号溝状土坑 完掘（南東から）



第18号溝状土坑 断面（南東から）

写真図版 13 溝状土坑（6）



調査区東側 第1～7号溝状土坑 完掘(上空から 写真上方が北)



調査区西側 第4・8～17号溝状土坑 完掘(南側上空から 写真上方が北)

写真図版14 溝状土坑(7)



图 12-1



图 12-2



图 12-3



图 12-4

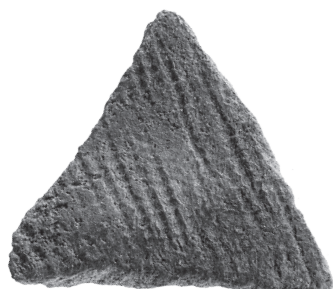


图 12-5



图 12-6



图 12-7

報告書抄録

ふりがな	どめきかっこさんいせき							
書名	百目木(3)遺跡							
副書名	国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第622集							
編著者名	齋藤 正、藤田 祐							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2021年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
どめきかっこさんいせき 百目木(3)遺跡	あおもりけんかみきたぐん 青森県上北郡 よこはままちあざどめき 横浜町字百目木	02406	406029	41° 02' 31"	141° 15' 33"	20190827 ～ 20191030	2,300	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
百目木(3)遺跡	狩猟場	縄文時代	土坑 溝状土坑	16 18	弥生土器 剥片石器	溝状土坑が列状に並んで検出された。		
要約	<p>百目木(3)遺跡は、牛ノ沢川南岸の標高36～37mの中位段丘上に位置する。土坑16基、溝状土坑18基を検出した。溝状土坑は縄文時代の落とし穴と考えられ、調査区の斜面落ち際に並ぶように配置が確認された。調査区周辺は狩猟場であったと考えられる。遺物は縄文時代の石器と弥生時代の土器が少量出土した。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第622集

百目木(3)遺跡

—国道279号横浜南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 令和3年(2021年)3月10日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印刷 株式会社東奥アドシステム
〒030-0862 青森県青森市古川1丁目21-12
セントラルビューあおもり2F
TEL 017-776-3771 FAX 017-776-3775

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部あたり1,997円(うち県費負担888円)です。